



エチオピア西南部クシ系農牧民ホールの家畜分類に関する覚え書き

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮脇, 幸生 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017497

エチオピア西南部クシ系農牧民ホールの 家畜分類に関する覚え書き

宮 脇 幸 生

1 はじめに

本稿は、東アフリカのクシ系牧畜民ホールの、家畜の分類体系を記述することを目的としている。

東アフリカの牧畜民は、家畜を分類するための非常に多くの語彙をもっていることが知られている。エヴァンス＝プリチャードは、南スーダンのナイル系牧畜民ヌエルが、ウシに関して「銀河系の如き膨大な語彙」をもっているとし、その紹介に1章をさいている (Evans-Pritchard 1940)。東アフリカ牧畜民の家畜の分類体系は、人間がそれをを用いて人間や環境を分類・思考するための、思考の媒介的モデルとでもいうべきものも提供している。儀礼では、機会に応じて特定の種類の家畜が供犠されるし、人間の分類はしばしば家畜の分類と対応させられる。そのためかれらの思考様式を知るためには、家畜の分類を明らかにすることが不可欠となる。しかしこのようなかたちで家畜と人間が対応させられる場合は、たんに二つの分類が恣意的に対応されるのではなく、より深い構造的な類似性にまでさかのぼって類比されていることが多い。家畜の分類体系はいうまでもなく、家畜の管理技術と密接に結びついている。そのため類比のベースとなる家畜の分類体系も、それが実践的に用いられている家畜管理技術の文脈において把握する必要があるだろう。

本稿では、家畜の分類体系を、家畜管理技術と関連づけて報告する。これはホールの思考のモデルを明らかにするための基礎作業としての意味ももつ。次節ではまず、ホールの居住環境と牧畜について紹介する。第3節では、家畜の

分類体系について述べる。はじめに、動物種の中での家畜の位置づけについて述べたあと、家畜の利用と管理に関する技術として、性別・成長段階別の分類について記述する。ついで、家畜管理の基礎となる個体識別を可能にする、毛色の分類体系を提示する。さいごに、家畜群の把握を可能とする、系統と年齢集団についての分類体系を示す。第4節では、こうした分類体系全般の研究が、家畜の象徴的な意義を考察するさいにも、より確かな基盤を提供することを示唆したいと思う。

2 ホールの居住環境

ホールはエチオピア西南部を流れるウェイト (Weito) 川下流域の標高500メートルほどの半乾燥地帯に居住しているクシ系農牧民である。ウェイト川は、源流をエチオピア西南部の山岳地帯にもつ、全長200 kmほどの長さの河川である。下流で、チャモ (Cham) 湖の西から発するセゲン (Segen) 川が合流し、ケニア国境までひろがるチャウ・バヘル (Chaw Bahir) 湖に注いでいる。川は河口付近で蛇行をしており、数十年に一度流れを変える。かつての川の流れは河跡となって残っており、複雑なネットワークをなしている。このあたりの年間降雨量は200mmから600mmであり、降雨は年間で二つのピークをなしている。2月から7月が大雨季、9月から10月が小雨季であり、4月に最大の降雨がある。雨季には、本流から河跡に水が浸入し、ウェイト川は大きく氾濫する。河川の氾濫によって冠水した地域は、上流から運ばれた水分と沖積度によって、肥沃な耕作地となる。このような氾濫原を、ホールはホール (hoor) と呼び、冠水のとどかないサバンナをアバール (abaar) と呼んでいる。

ホールはウェイト側の河畔に、4つの地域集団に分かれて居住している。北から順に、ガンダラブ (Gandarab)、クラム (Kulam)、ムラレ (Murale)、エグデ (Egude) という。さらに北方の2集団をあわせてアルボレ (Arbore)、南方の2集団をあわせてマルレ (Marle) という。ガンダラブは200世帯、そ

の他の地域集団はそれぞれ100世帯ほどの世帯からなり、ホール全体でおよそ2500人から3000人ほどの人口を擁している。それぞれの地域集団は、政治的に独立している。各地域集団には、最高の権威である儀礼首長 (kawot)、それに次ぐ権威をもつ政治首長 (kernet)、年齢階梯で中心となる世代組から選ばれる評議員集団 (jalaab)、耕作地の分配者集団 (mura) などがいて、資源の分配や政治的裁定、儀礼の遂行をおこなっている。

ホールの居住形態は、三つに分けられる。地域集団が集住する集落は、durrと呼ばれる。ここでは由来の地にもとづいてクランごとに居住位置が決まっている。それぞれの世帯は、クランと、その中のリネージの長幼の序にもとづいて、規則正しく中央の広場をぐるりと取り囲むような形で集住している。地域集団の儀礼や政治的な決定は、すべて定住集落で行われる。定住集落は氾濫原の近くの平原に位置しており、ほとんど移動することがない。定住集落では主に農耕がおこなわれている。ヤギとヒツジも、集落か、あるいはその近辺の作り集落で飼養される。定住集落の周囲には、いくつかの世帯からなる作り集落 (reer) がある。作り集落は生産のための仮の居住地であり、牧畜や農耕の必要のために、氾濫原や牧草のある地域に居住しているにすぎない。定住集落や作り集落から数十キロ離れた草原には、牧畜キャンプ (furitch) が多数遊動している。ここではホールのウシの大多数が飼養されており、年齢階梯の中でもっとも年少の世代組がその任にあたっている。放牧に従事する牧童たちは、泌乳量の低下する乾季の一時期をのぞけば、ウシの乳と血に全面的に依存して生活している。牧畜キャンプは、季節に応じて密集と散開を繰り返している。雨季に、氾濫原が冠水している時期は、牧畜キャンプはサバンナの山際近くに散開する。乾季が進み、水場が少なくなり、サバンナの牧草が尽きてくると、牧畜キャンプは氾濫原に密集してくる。氾濫原には井戸 (el) が掘られ、そこで家畜は給水される。

ホールの生業の中で中心となるのは、ウェイト川の冠水が引いた後の肥沃な氾濫原で行われる農耕である。全食料のうちの70%以上は、モロコシを中心と

する穀物によっている。最も肥沃な氾濫原は、地域集団ごとに共有資源として囲い込まれ、分配役の長老たちによって各世帯に分配される。

畜産品は、ホールの消費する食物の重量からいえば、穀物にはおよばない。しかしホールは、家畜の乳と血、そして肉を、穀物よりも好む。¹ さらに牧畜は、ホールにとって、単なる食料の生産以上の意味をもっている。家畜は、供犠獣として、儀礼の中で中心的な役割をはたす。交換の媒体として、婚姻のときに婿側から嫁側に多くの家畜が移譲される。また、男性の若者はお気に入りの去勢牛を選び、愛でる。さらに牧畜キャンプが設営されるサバンナは、敵の襲撃からウシを守り、敵のウシを略奪する戦闘の場でもある。男はウシを守って死ぬことを「ウシの糞となる」といい、大きな名誉だと考えている。次節ではホールが、これらの家畜をどのように分類し、飼養しているかについて明らかにしよう。

3 家畜の分類体系

3.1 動物の分類と家畜の位置づけ

ホールは、動物一般をさす語彙をもっていない。そのかわりに動物たちを、人間とのかかわり方に応じて、いくつかのカテゴリーに分類している。ひとつは、食用となる野生草食獣である。ガゼル (eze)、シマウマ (oholai geeta)、エランド (oroch) などがふくまれ、これらはbusauとよばれる。これにたいして、ライオン (neek)、ヒョウ (chaar)、ゾウ (arap)、バッファロー (gasar) など、狩猟の対象とされる大型獣、あるいは肉食獣は、miauとよばれる。これを殺したものは、人々から大きな賞賛を与えられる。そして、ハイエナ (warach) やヒヒ (deerit)、ヘビ (toofu) など人間に対して害を与える

1 搾乳をする主たる家畜はウシであり、ヤギからは少量の乳が取られる。メスウシは搾乳のため飼養され、オスウシは去勢後交換に出されたり儀礼で屠殺されたりする。しかし、たんに食用に屠殺されることは少ない。小家畜は、もっぱら食用に屠殺される。

動物は、binanというカテゴリーに入れられる。これらのカテゴリーはすべての動物を包摂するわけではないし、いくつかのカテゴリーは、互いにオーバーラップしている。² 家畜は、これらの動物とは区別され、kol (sig. naf) とよばれている。

ホールの飼育している家畜は、ウシ (ot)、ヤギ (reet)、ヒツジ (helat)、ロバ (ohol) である。これらにラクダ (gaal) を加えたものが、ホールがkolとよぶ動物のカテゴリーである。ホールはこれらの家畜を、その性別や生育段階に応じて、細かく分類し、異なった名称でよぶのである。家畜はまた、seともいう。seという言葉が複数形として用いられる場合は、ウシ、ヤギ、ヒツジのいずれをも意味するが、単数形として用いられる場合は、メスのウシのみを意味している。

3. 2 家畜の分類

家畜は、他の動物とは異なり、非常に細かい分類がなされている。以下に、家畜の分類体系を、1. 家畜管理にかかわる分類、2. 個体識別にかかわる分類、3. 群れの構造把握にかかわる分類、の三つにわけて、記述してゆく。

3. 2. 1 家畜管理にかかわる分類

(1) 群れの分類

ホールの家畜の中でも、生活に密接にかかわっているのは、ウシ、ヤギ、ヒツジである。これらの家畜には、群れ全体をあらわす語彙がある。ウシの群れはot (pl. ottante)、小家畜であるヤギやヒツジの群れは、edi (pl. enDe) とよばれる。ヤギの群れとヒツジの群れを区別してよぶ場合には、ヤギの群れを

2 上記の分類以外の動物分類として、人間 (modo)、鳥 (kirmate)、大型猛禽類 (kiilante)、ナマズ (beg)、背びれのあるナマズの一種 (kalate) がある。kirmateには少なくとも55種の鳥が、kiilanteには5種の猛禽類が区別され、含まれる。しかしbeg、kalateはそれぞれ1種のみしか区別されていない。

reet、ヒツジの群れをheelatとよぶ。これらはいずれも、経産メスの複数形である。

これらの群れは、さらに飼養されている場所に応じて、異なった名前によばれることがある。牧畜キャンプで飼養されているウシの群れはgorba、あるいはotta furich、集落で飼養されているウシの群れはokkich、あるいはotta waritとよばれる。一方、牧畜キャンプで飼養されている小家畜の群れはedi furich、集落で飼養されている小家畜の群れはedi waritという。

ウシの群れ、ヤギとヒツジの群れ、ともに用いられる二項命名法は、群れを示す語彙素のあとに、場所を示す語彙素を修飾語として付加したものである。たとえば、otta furichは、ot (ウシの群れ) + furich (牧畜キャンプ)、otta waritは、ot (ウシの群れ) + wari (家族、リネージ) という構造になっている。それにたいして、ウシの群れのみ用いられるgorba、okkichという名称は、それだけでそれぞれ牧畜キャンプの牛群と、集落の牛群を意味する。実際にはこちらの単項名称のほうがよく用いられる。

(2) 群れの分類と家畜管理

家畜の群れを分類する語彙には、ホールの家畜にたいする見方が現れている。家畜はまず、大家畜であるウシ (ot) と、ヤギ、ヒツジをひとまとめにした小家畜 (edi) に分類される。次いで小家畜は、ヤギ (reet) とヒツジ (heelat) に下位分類される。またウシのみが、飼養地によって群れを単一語彙であるgorbaとokkichという名称によって区別される。

家畜がまず大家畜と小家畜に分類されるのは、家畜の大きさや繁殖の早さの違いといった生物学的な要因によるだけでなく、放牧方法の違いにもよるだろう。家畜は、リネージの成員の居住する定住集落や出作り集落と、牧童が管理する牧畜キャンプに分散して飼養される。ウシは、定住集落、出作り集落、牧畜キャンプのいずれでも飼養される。しかし、小家畜は長距離の移動が困難なために、氾濫原の近くにある定住集落か出作り集落の、いずれかでまとめて飼

養される。さらにホールは、それぞれの家畜種がことなった種類の牧草を好むことを知っている。ウシと小家畜を分離して飼養するのは、こうした牧草の植生の違いも関係している。またウシはしばしば、男性の青年によって、他の家畜とは独立して放牧される。それにたいしてヤギとヒツジは、ひとまとめにして少年少女によって放牧されることが多い。

牧畜キャンプと定住集落のそれぞれで飼養されるウシの場合、牧童は、家畜のコンディションや環境の季節的変化を計算し、群れの構成を変えねばならない。牧畜キャンプが設営されるサバンナには、ウシの飼養に適したイネ科の牧草が多い。牧畜キャンプにはだから、種ウシ、去勢牛のすべて、そしてメスウシの大多数が飼養される。牧畜キャンプはウシ群の再生産の場であり、また出産を通じた乳牛の生産の場でもある。しかし一方では、牧畜キャンプでは、乾季には飲料水が少なくなる。また日帰り放牧や季節的な移動のさいには、群れは長距離を移動する必要がある。だから体力の弱った家畜には厳しい環境ともなる。これと反対の条件をもつのが、氾濫原に近い定住集落である。ここは良い牧草が少ないかわりに、水場に近い。またウシのミルクを必要とする人間の幼児をふくむ、人口の大部分が居住している。だからここには、何頭かの乳牛とその子畜、そして長距離の移動が困難になった老牛が飼養される。定住集落におかれた乳牛の乳が止まると、ウシは牧畜キャンプに戻される。仔ウシはそこで成牛になるまで飼養される。どの家畜を牧畜キャンプにおき、どの家畜を定住集落で飼養するかは、牧畜キャンプの牧童の判断に任される。

以上のように、ウシの場合は牧畜キャンプと集落への群れの分割が重要性をもつ。それにたいしてヤギやヒツジの小家畜は、多くの場合集落でひとまとまりに飼養されており、飼養場所による群れの区別は大きな意味を持たない。このことが、ウシ (ot) と小家畜 (edi) という家畜群の区別や、ウシの飼養地ごとの群れを区別するgorbaとokkichという単一語彙素からなる名称に反映しているのだろう。

表1 ウシの性別・成長段階による分類(カッコ内は複数形)

	第一段階	第二段階	第三段階
メス	maar	goran(gorno)	takka dalite(takka dali) okkite(okkei)
オス	lit (linme)	非去勢 kurkurit(kurkure)	arr(arre)
		去勢 mirgo(mirgon)	hau(hauten)

(3) 性別・成長段階による分類

ホールの語彙には、日本語の「ウシ」「ヤギ」「ヒツジ」にそれぞれ対応するような、家畜の種じたいをあらわす語彙がない。けれどもそれぞれの種内では、性別と成長段階に応じて、細かな分類がなされている。これらのなかでもウシの分類は、最も詳細なものとなっている。

ホールは家畜の成長段階を、大きく三段階に分けている。例として、ウシの性別・成長段階による分類を、表1に示す。第一段階は、メスの場合まだ妊娠ができない仔畜をさす。オスの場合は、この段階のメスと同じ大きさの仔畜をふくむ。ウシの場合は生後1～3年、ヤギ、ヒツジは生後1年前後までがこの段階に含まれる。第一段階から第二段階へ移行するのにかかる期間は、牧草の多寡によっても異なる。当然、豊富な牧草があれば、家畜の生育は早くなる。第二段階は、メスの場合、妊娠可能になった段階である。未経産であることが、このカテゴリーに含まれること条件である。この段階でオスの場合は、将来種オスになる個体が選別され、去勢されたオスと去勢されていないオスが名称により区別される。³ この段階は期間的に短く、ウシの場合は生後4年ぐらまで、ヤギやヒツジの場合は、生後1年半ぐらまでである。第三段階は、家畜が成熟した段階である。メスの場合は、子供を産み、泌乳する。オスの場合

3 去勢の方法は2種類ある。ひとつはナイフで睾丸を取り出すやり方で、sinnantoとよばれる。もうひとつは、木槌で精管を叩きつぶすやり方であり、tumiという。ナイフで睾丸を取り出すやり方のほうが、去勢牛の成長が早いという。しかし傷口が化膿する可能性の高い雨季には、後者のやり方が行われる。

は、種オスとなっているか、屠殺用の去勢オスとなっている。ホールは、メスウシの場合は、一頭の仔牛のみを産んでいる経産牛 (takka dalite) と、二頭以上を産んでいる経産牛 (okkite) を区別している。

第一段階と第三段階には、この基本的な分類に加えて、さらに別の分類が用いられる。

第一段階の分類では、さらに、ウシの仔畜の個体群は、メス (mar) とオス (lit) をともに一括して、maarrとよぶ。これは性別を区別せずにウシを指し示す語彙であるotの中の、仔牛の部分集合を示す語彙となる。同様にヤギとヒツジでは、第一段階にある個体群を、性別を区別せずにenokとよぶ。これは小家畜一般を指し示す語彙であるediの、仔ヤギ、仔ヒツジの部分集合を示している。

これとは逆に、成熟した第三段階の、メスウシの個体群は、繁殖力や泌乳量によってより細かな分類がなされる。不妊の個体は、他から区別してngoochとよばれる。また妊娠中の個体は、kandaとよばれる。⁴ 仔ウシを生み、泌乳中の個体は、eenoとよばれ、泌乳中でないものはguaとよばれる。泌乳中の個体で、仔ウシを生んでから1週間くらいまでの母ウシをerbanteといい、それ以降の母ウシをchonoleとよぶ。また、ことに多くの乳を出す個体はmurgisaとよばれ、逆に乳量の少ないものは,baakoとよばれる。

(4) 性別・成長段階による分類と家畜管理

性別と成長段階にもとづく分類は、ホールの家畜の利用と管理に、密接に関連するものである。このことは、メスの場合は妊娠能力と経産経験に基づいてそれぞれの成長段階が区別されていることから明らかであろう。オスの場合は、去勢をするじてんが、第一段階と第二段階の成長段階を区別する指標とされる。

4 妊娠して3ヶ月目くらいで乳頭が突き出してくることが、kandaを見分けるめやすとなる。

第一段階で仔ウシと仔ヤギ・仔ヒツジがそれぞれ特定の名称で一括して分類されるのは、その飼養方法と関係しているのだろう。仔ウシは親ウシたちとは別の家畜囲いに入れられて、別々に飼養される。これは、仔ウシの移動能力や給水頻度、必要とされる牧草の種類が親ウシと異なっているからだけでない。仔ウシと親ウシを分離した群れとして管理することで、搾乳のさいの介入をより容易にする意味ももつのである。⁵ ヤギ・ヒツジの場合も、同様である。

第二段階で種オスと去勢オスの区別がつけられたのち、成熟して第三段階に達した去勢オスは、ウシの場合は、儀礼的な屠殺や市場での交換の対象となる。ヤギ、ヒツジの場合は、儀礼的な屠殺に加え、日常的な食用のための屠殺の対象となる。⁶ この段階では、成熟したメスの個体が強い注意をひきつける。ことにウシの場合は、出産とそれに続く泌乳が、人間に搾乳という介入行為をうながす。経産メスウシが出産力や乳量などによって細かく分類されるのは、このことを反映している。

さいごに、こうした家畜管理のようすを示す統計的なデータを提示しておこう。

図1は、7人の所有者のウシ囲いから得られたウシの成長段階別の構成を示

5 搾乳は、放牧前の明け方と、放牧から帰った夜の2回に分けて行われる。このとき仔ウシを、仔ウシ囲いから1頭ずつ名前を呼んで連れ出し、母ウシから授乳させる。ある程度授乳させたあとで仔ウシを母ウシから引き離し、牧童が搾乳を開始する。

6 例外は、若い男性がしばしばもっている、自分のお気に入りの去勢ウシである。この去勢ウシをambsetという。背中のこぶが直立して、他のウシの中でも目立ちやすいものが、ambsetとして好まれる。特定の毛色が選択されることはない。所有者はambsetをたたえる歌を歌い、まるで自分の子供のように愛情を注ぐ。ambsetのことを考えると、からだに強い興奮がはしるという。ambsetが死ぬと、所有者は年齢組の仲間を集めて、共食する。ambsetを市場で売るとは、年齢組の仲間たちによって厳しく罰せられるが、マシンガンを購入するときのみ、例外として許される。このことはambsetと戦いのエトスの間の、強い関係性をうかがわせる。ambsetを所有する慣習は、エチオピアとスーダン国境に居住するナイル系農牧民Nyangatomから伝播してきたといわれている。

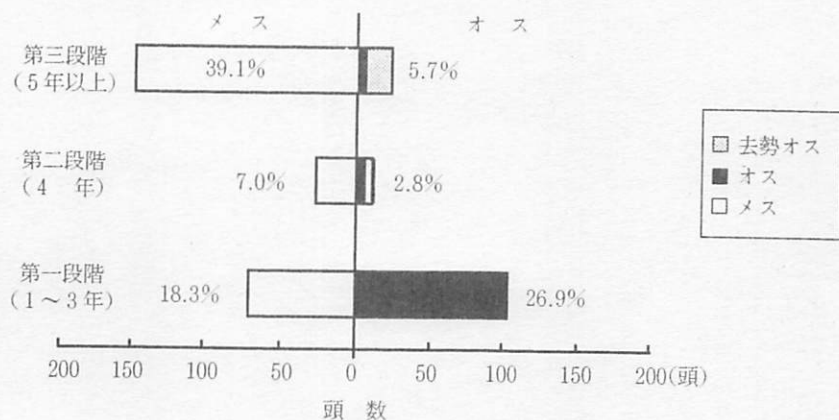


図1 ウシ成長段階別構成図(7つの家畜囲いの合計)

している。第一段階の仔ウシは、オスとメスをあわせて45.2%と、全体の半分近くを占める。オスとメスの比率は、およそ7対10となっている。第二段階のウシは、オス・メスあわせて9.8%であり、第一段階のおよそ4分の1になっている。これは第二段階の期間がおよそ半年から1年であり、第一段階がほぼ3年の長さがあるのに比べると、それよりも3分の1から4分の1の長さしかないことを反映している。しかしメスとオスとでは、第一段階と第二段階の比率は大きく異なっている。メスの場合は18.3%から7.0%へととなり、第二段階の頭数は第一段階のおよそ4割であるのに対し、オスの場合は26.9%から2.8%へととなり、ほぼ10分の1になっている。この結果、オスとメスの比率はおよそ3対1となり、逆転する。第三段階のウシは、メスとオスを合わせて44.8%であり、第一段階とほぼ同じ割合である。しかしオスとメスの比率は8対1となり、オスの選抜が継続していることをうかがわせる。

第一段階では、メス・オスともにはほぼ同じ比率であり、群れ全体の半分近くを占める。短期間の第二段階では、オスとメスの比率が逆転する。このことは、すでに第二段階でオスの選抜が開始されていることを示している。オスは儀礼で屠殺されるか、マーケットで交換に出される。また、去勢牛と交換にメスの

未経産牛が購入されることで、メスの割合が相対的に増加しているものと考えられる。第三段階のウシも、群れの半分近くを占めるが、そのほとんどはメスである。オスの比率が第二段階にくらべても低下していることから、この段階でも、去勢牛は家畜群から、交換や屠殺の形で放出されつづけていることがわかる。このように群れの性別・成長段階別の構成は、家畜の利用形態をはっきりと反映している。群れは、家畜群の再生産をし乳を提供する母畜と、その仔畜を中心とし、それに少数の種ウシを加えた形で構成されているのである。⁷

性別と成長段階にもとづく分類体系は、搾乳・肥育・群の再生産といった、家畜の経済的利用にかかわる家畜管理方法と密接に関連した分類体系である。次に、こうした家畜の管理に必要な不可欠な、家畜の個体識別を可能にする分類体系を検討する。

3. 2. 2 個体識別にかかわる分類¹

(1) 毛色と模様による分類

東アフリカの牧畜民社会では、色彩の語彙体系が発達していることが知られている。これらの社会では、ウシをはじめとする家畜の毛色が多型化しており、こうした多様な毛色を区別するための分類体系が、色彩語彙の基礎をなしているからである。

ホールの色彩語彙体系も、東アフリカの他の牧畜民社会の例にたがわず、家畜の毛色の分類体系を基盤としている。ホール語には、われわれの言葉で、色を包括的に示す抽象的な名詞である「色彩」という語に相当する言葉はない。そのかわりに、「色彩」という語に最も近い言葉として、biifという言葉をおけることができる。これは、まずだいいちに、動物、ことに家畜の毛色と模様

7 80頭の個体をふくむ一つのヤギ囲い(所有者2人)を調べた結果、上記のウシ囲いの構成と非常に似ていた。この囲いのヤギの構成は、以下のようになっている。第一段階メス15(18.8%) オス24(30.3%)、第二段階メス6(7.5%) オス0(0%) 第三段階メス27(33.8%) オス8[去勢4 非去勢4](10.0%)。

をあらわす言葉である。ホールには個別の色彩を指示する多様な語彙が存在する。たとえば、黄色いブルドーザーを指してその色をたずねると、「moramorachaだ」という答えが返ってくる。しかしmoramorachaはbiifではない。なぜならばmoramorachaの毛色をもつ動物は存在しないからである。moramorachaという言葉自体、黄色のビーズを意味する言葉から流用された色彩語彙である。

ホールの牧童に、どのようにして多くの家畜を個体識別しているのかをたずねると、まずbiifによっている、という答えがかえってくる。家畜の個体認知は、家畜群を管理する牧童にとって、必要不可欠な技術である。放牧から帰った後に、群れの家畜がすべて帰っているかを確認するとき、泌乳牛を特定して搾乳するとき、またローテーションを組んで牛の静脈から飲用の血を採取するとき、牛の個体認知が必要となる。さらに、群れを共同管理するほかの牧童と家畜の状態について話し合うさいに、特定の個体に言及するときに、互いの共通理解が得られねばならない。だからホールがbiifの範疇にふくむ語彙は、われわれが「色彩と模様」というように、ひとくちに抽象的な語で示してしまうものよりも、はるかに、家畜の毛色の具体的な発現形態と、それにたいする識別行為に、密接に結びついているように思われる。以下にbiifの内容を、①色彩語彙、②模様語彙、③家畜の特定部位の毛色を指示する語彙、の三つに分けて記述してゆくことにする。そしてこれらの語彙が、どのようなやりかたで用いられ、家畜の個体を識別するシステムとして機能するかについて述べる。

(1) - 1 毛色の語彙

① 色彩語彙

6人のホールの成人男性にたいして、98色の色票調査をランダムに提示して、色彩語彙の採集をおこなった。⁸その結果をもとにして、ホールの色彩語彙について述べてゆこう。

A 単独の語彙素によりあらわされる色彩

色票調査の全試行のうち、単独の色彩語彙素は15種類言及された。この中で、ホールがbiifであるとみなし、家畜の毛色を指し示すのにしばしば用いている語は、以下の10語である。

1 buri 赤を中心として、つよい赤（ばら色）、つよい橙（キャロット・オレンジ）、つよい赤紫をふくむ。

血の色、花の色、木を切ったときの切り口の色、明るい肌の人間の色もこの語彙で示される。家畜の毛色に用いられた場合は、赤っぽい茶色の毛色をさす。ウシ、ヤギ、ヒツジにみられる。

2 bori うすい橙（はだ色）、あかるい黄橙、あかるい橙（シナモン・ピンク）、うすい黄橙（とうもろこし色）をふくむ。

家畜に用いられる場合は、薄茶色からベージュ色の毛色をさす。ウシとヤギにみられる。

8 以下に単独の語彙素の出現頻度を示す。なお、出現回数とは6人の全試行数588回（ $98 \times 6 = 588$ ）中にその色彩語彙が単独で言及された回数、出現率とは全試行中でその色彩語彙の出現回数の占める割合、一致した色票数とは、複数のインフォーマントにより、同一の語彙素によって言及された特定の色票の枚数である。インフォーマントの3分の2以上が言及し、かつ彼らが毛色と認める色彩語彙（下の表では、点線よりも上の色彩語彙）を、本文中で毛色の色彩語彙としてとりあげた。

色彩語彙	出現回数 (回)	出現率	言及者数 (人)	一致した色票数					該当する色彩
				6人	5人	4人	3人	2人	
ili	143	24.3%	6	10	5	7	2	8	青・緑
niro	72	12.2%	6	0	3	7	3	7	くすんだ茶色
jana	42	7.1%	6	0	0	3	3	3	灰色
bori	39	6.6%	6	0	2	3	1	2	うすい黄色・ベージュ
buri	34	5.8%	6	1	1	2	1	4	赤
wati	31	5.3%	6	2	0	1	1	3	黒
rema	25	4.3%	5	0	0	3	1	2	うすい紫
magal	10	1.7%	5	0	1	0	0	0	黒に近い紫
eri	5	0.9%	5	0	1	0	0	0	白
mulug	14	2.4%	4	0	0	0	0	4	濃い紫
moramorach	14	2.4%	4	0	0	3	0	1	黄
gido	4	0.7%	2	0	0	0	0	0	ふかい赤
eede	5	0.9%	1	0	0	0	0	0	黄
ronma	2	0.3%	1	0	0	0	0	0	銀色
jimo	1	0.2%	1	0	0	0	0	0	青紫

3 niro にぶい黄橙（枯葉色）、深い黄橙（たばこ色）、くらい黄橙（こげ茶色）を中心とした、彩度の低いにぶい茶色系統の色彩をふくむ。

家畜の毛色では、深い金色に見える。ウシとヤギにみられる。

4 ili 純色の緑から青緑、青を中心として、つよい黄緑、ふかい青緑まで、青から緑までの広い範囲をふくむ。ウシ、ヤギ、ヒツジにみられる。

草の色も示す。家畜の毛色では、光沢のある深い銀色をさす。

5 rema あかるい紫、うすい紫、にぶい紫をふくむ。家畜の毛色では、薄紫のかす毛をさす。ウシとヤギにみられる。

6 jana 灰色、灰色がかった青、灰色がかった紫をふくむ。家畜の毛色では、灰色に見える。ウシにみられる。

7 magal くらい赤紫。ホールの肌の色は、この語彙で表現される。家畜では、黒に近い紫がかった毛色さす。ウシとヤギにみられる。

8 mulug 紫、ふかい紫、くらい紫、赤紫をふくむ、magalよりもわずかに明るい、彩度、明度の低い紫系統の色彩。家畜では、濃い紫色の毛色に用いられる。ヤギに多い。もともとはBorana語であるといわれる。

9 ezi 白。家畜の毛色ではウシ、ヤギ、ヒツジにみられる。象徴レベルでは、白は乾燥、悲哀、不毛をあらわす。

10 wati 黒およびくらい灰色。黒い毛色のほか、空の色、水の色、黒い肌の人間の色もこの語彙で表現する。家畜ではウシ、ヤギ、ヒツジにみられる。神(waak)の色も黒であるといわれる。象徴レベルでは、黒は湿潤、豊穡をあらわす。

色彩語彙体系の通文化比較をしたBerlinとKayによれば、世界のいかなる言語にも、2から11の色彩基本語が存在するという。また、これらの色彩基本語のカバーする色彩の範囲は、文化にかかわらずほぼ一定の領域である。さらに彼らは、色彩基本語の体系には、白と黒の二語から成る最も単純な体系から、特定の色彩語彙が加わってゆき、最終的に11語の色彩語彙を持つもっとも複雑

な体系にいたるといふ、秩序だった進化の図式を示し、色彩語彙の進化の段階は、その文化の物質文化の進化段階と密接な関連があるとした (Berlin and Kay 1969)。

BerlinとKayの普遍主義的な仮説にたいしては、多くの批判がなされている。東アフリカの牧畜民社会の色彩語彙研究からは、これらの社会が、簡素な物質文化しか持たないにもかかわらず、多様な色彩基本語を持つこと、またそこで見られる色彩基本語は、BerlinとKayの進化論的仮説の予想する色彩基本語とは必ずしも一致しないことが指摘されている。たとえば、これらの社会では多くの色彩基本語が見出されるにもかかわらず、進化段階の比較的初期に分離されるはずのgreenとblueが区別されていないことが多い (Tornay 1973)。

ホールの色彩語彙体系を検討すると、色彩語彙の数の多い点、それにもかかわらずその構成は色彩基本語の進化論的な図式から逸脱している点で、これまでの東アフリカ牧畜民社会の色彩語彙研究を裏づけている。けれども、ほかの牧畜民の例と比較しても、ホールの色彩語彙体系が独特である点は、他の色彩語彙体系をもつ文化からきた人間には区別することが困難な、彩度の低い、微妙な色彩語彙を豊富に擁する点にあるように思われる。

BerlinとKayによれば、すべての色彩基本語は焦点となる色彩の範囲を有しており、それは文化にかかわらず、一定の狭い範囲に収斂する。このことは、色彩の認知が文化的な要因よりもむしろ、生理学的な色彩認知の機構に規定されていることを示している。

しかしホールの色彩語彙では、こうした普遍的な色彩認知の焦点に適合する範囲をはっきりとカバーしているのは、buri (赤)、ili (緑・青)、ezi (白)、wati (黒) の4語だけである。これらの語彙は、対応する日本語の色彩語彙の範囲とほぼ重なり合い、調査者にもすぐに習得できるものだった。ところが残りの6つの色彩語彙については、習得するのに困難をきわめた。たとえば、灰色をさすように思えるjanaという色彩語彙も、実際には青みがかったり紫がかったりする灰色の色票がふくめられる。けれども逆に、何枚かある無彩色の、わ

れわれならばためらわず灰色にふくめる色票は、指示されなかった。niroという語彙は、われわれの語彙では黄土色と呼べそうな色彩から、こげ茶と呼べそうな色、そして灰色に分類しかねない色彩までをふくんでいる。boriは、ぼんやりとした黄色っぽい色をさしているように思われた。ところがわれわれがためらわず黄色と呼ぶ色彩は、boribura（赤っぽいすい黄色）と呼んだり、moramorachaという、黄色のピーズを意味する言葉で指示される。もっとも困難だったのは、紫系統に含められる3語を区別することだった。そのなかでも、比較的わかりやすいのは、うす紫を意味するremaという語彙である。われわれが紫と呼ぶ色彩は、remaburo（赤っぽいす紫）と呼ばれたりする。困難なのは、濃い紫を意味するmagalとmulugを区別することである。magalという色彩語彙については、6人中5人のインフォーマントが「くらい赤紫」の色票を指示した。それにたいして、mulugとして示された色票はインフォーマントにより分散しており、少なくとも二人によってmulugとされたものは、「紫」、「ふかい紫」、「くらい紫」、「赤紫」だった。これは一見われわれの「紫」という語彙と重なるように見えるが、一人のインフォーマントがそのうちでも典型的なmulugであるとしたものは、「くらい紫」であり、私にはmagalaの「くらい赤紫」と識別することは不可能だった。

これらのあいまいに見える色彩語彙を、色相、明度、彩度という色彩の3属性から定量的に規定するとどのようになるだろうか。boriという語彙で指示される色彩は、黄色から黄橙、橙までの色相（4～8）にまたがり、明度が18～19、彩度が2～4の間の領域をカバーしている。niroという語彙で示される色彩は、boriと同様に黄色から黄橙、橙までの色相にまたがり、明度が12～16、彩度が1～4までの領域をふくむ。どちらも同じ色相の、彩度の低い色彩領域をカバーしているが、この二つの色彩語彙の区別の基準は、明度の違いであることがわかる。remaは紫の色相（21）で明度16～18、彩度2～5の領域をカバーする。mulugは色相が紫から赤紫（21～23）明度が11～13、彩度が3～5の領域を、magalaは色相が赤紫、明度11、彩度3の領域をカバーしている。re-

maとmulug、magalaは、明度の違いが区別の基準となっている。mulugとmagalaの違いはより微妙だが、相対的にmulugのほうが、より明度、彩度ともに高い範囲の色彩をカバーしているように思われる。しかし私のデータからは、どの点でmulugとmagalを区別するのかは、インフォーマントによりかなりのばらつきがある。

色票調査によれば、基本的な色彩語彙で言及されない領域のほとんどは、基本的な色彩語彙を組み合わせて言及されている。⁹ 2人以上のインフォーマントにより言及された色彩複合語彙は20種類と、決して少なくない。しかし、色彩複合語彙で言及されるインフォーマント間の色票の一致度は低く、文化的に色彩認知の不安定な領域であることがわかる。後に示されるように、家畜の毛色が色彩複合語を用いて言及されることは、きわめてまれである。

② 模様語彙

ホールは色彩だけでなく、家畜の毛色に見られる模様もbiifと呼んでいる。模様はさらに、模様自体を指すものと、家畜の特定の部位の毛色に注目するものの2種類がある(図2)。ここでは前者の模様について記述する。

実際の家畜の毛色を見ると、単に多様な毛色があるだけでなく、それらの毛色が微妙に入り混じっていることがわかる。以下に示すのは、はっきりした明度差をもった二つの色彩が形成するパターンというよりも、微妙なグラデーショ

9 3人以上のインフォーマントの言及した色彩複合語を示す。摘要は注9を参照。

色彩語彙	出現回数 (回)	出現率	言及者数 (人)	一致した色票数					該当する色彩
				6人	5人	4人	3人	2人	
ili ezi	19	3.2%	6	0	0	0	2	5	明るい黄緑、空色
ili wati	9	1.5%	5	0	0	0	1	1	にぶい緑青
rema ezi	6	1.0%	5	0	0	0	0	0	うすい青紫など
rema buri	8	1.4%	3	0	0	0	0	3	紫、強い紫、深い紫
niro ezi	9	1.5%	3	0	0	0	0	1	灰 紫
niro wati	4	0.7%	3	0	0	0	0	1	くらい黄色
jana ezi	6	1.0%	3	0	0	0	0	0	うすい青紫など
buri bori	5	0.9%	3	0	0	0	0	0	橙、強い橙など
niro bori	3	0.5%	3	0	0	0	0	0	にぶい橙(レンガ色など)

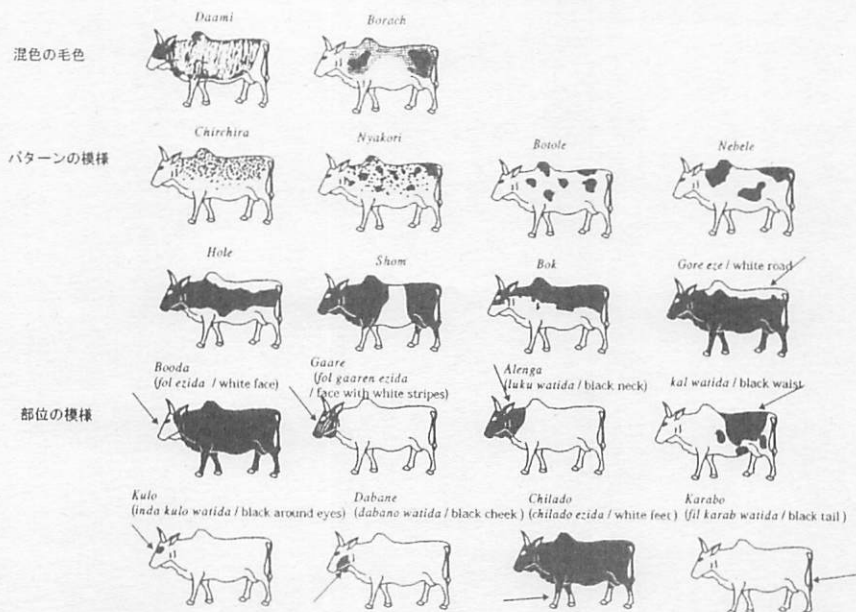


図2 ウシのさまざまな模様

ンをなして毛色に変化していたり、細かく入り混じっているような色彩の混合状態を示すbiifである。

- 1 borate 赤とベージュの混ざった毛色。
- 2 kirite 白のまざったベージュ。
- 3 sagato ほんの少し白のまざったベージュ。
- 4 birite 少し赤の混ざった白。
- 5 elgich 白 (ezi)、黒 (wati)、青=ふかい銀色 (ili) が細かい縦じま模様となって混ざり合った毛色。全体的に黒みがかっている。ウシだけにみられる毛色。
- 6 dami 白、黒、青が細かい縦じまとなり混ざり合うが、elgichよりも全体的に明るい。ウシのみの毛色。

明度差のある二つの色彩が、よりはっきりとしたパターンをなす場合を指し

示す語彙がある。これを混色をあらわす模様語彙と区別するために、パターンの模様語彙と呼ぼう。これには以下のようなものがある。

7 chirchira 小さな斑点模様。斑点の色は、黒 (wati)、赤 (buri)、ベージュ色 (bori) がある。家畜ではウシとヤギに見られる。野生動物ではヒョウの毛色がこれにあたる。

8 nyakori chirchiraよりも大きな斑点模様。斑点の色は、黒 (wati)、赤 (buri)、ベージュ色 (bori)。家畜ではウシとヤギにみられる。

9 botole nyakoriよりも斑点の数が少ない。ウシに多い。野生動物では、ハイエナの毛色がこれにあたる。

10 hole 体の真中に水平に一本の太い横じまが入る。

11 shom 身体に縦に一箇所のみ模様が入る。ウシ、ヤギ、ヒツジにみられる。

12 bok 水平方向のツー・トーン・カラー。上部が赤か黒で、下部が白くなる。ウシにのみみられる。

13 gore eze 背中に沿って白い筋が入る。「白い道」という意味。

③ 特定部位の毛色を指示する語彙

特定部位の毛色を指示する語彙には、単一の語彙素により特定部位の毛色をあらわす表現と、「部位名」+「色彩語彙」という形をとった説明的な表現がある。単一の語彙素による表現には、以下のものがある。

1 boda 全身が黒、あるいは赤の中で、顔のみが白い場合。「顔が白い (fol ezida)」とも呼ばれる。

2 alenga 首から上が黒、または赤い場合。「首が黒い (luku watida)」あるいは「首が赤い (luku burida)」とも呼ばれる。

3 gare 顔に白の縦じまがある場合。「顔に白の縦じまあり (fol gaaren ezida)」とも呼ばれる。

4 kulo 目の周囲が黒い場合。「目の周りが黒い (inda kulo watida)」とも呼ばれる。

5 dabane 頬が黒い、あるいは赤い場合。「頬が黒い (dabane watida)」あるいは「頬が赤い (dabane burida)」とも呼ばれる。

6 chilado ひずめの周辺の足先が白い場合。「足の先端が白い (chilado ezida)」とも呼ばれる。

7 karabo 尻尾の先端が黒い。「尾が黒い (fil karabo watida)」とも呼ばれる。

部位名に色彩名を付加する説明的な表現には、以下のようなものがある。(以下が色彩語彙をあらわす)

8 kal + wati 下半身が黒い(あるいは赤い)毛色。「腰が+黒い」という意味。

9 mete kul + buri 頭の角の周りのあたりが赤い毛色。「頭の上部が+赤い」という意味。

10 fol + ezi 額が白い毛色。「額が+白い」という意味。

11 kol+ezi 肩が白い毛色。

1～7の単一の語彙素は、いずれも「部位名」+「色彩語彙」という形をとった説明的な表現と代替することができる。そのうちの3～7は、こうした説明的表現の一部を取り出して語彙素とした、換喩的な表現となっている。これらの部位の毛色をあらわす語彙は、実際に家畜の毛色を表現する場合は、単独の語彙であらわされるよりも、むしろ、「部位名」+「色彩語彙」という説明的な表現で用いられる。

(1) - 2 毛色を言及するシステム

以上のような語彙体系を用いて、ホールは家畜の毛色を示す。ホール語にお

表2 観察されたウシの毛色語彙の一覧

毛色表現	ウシ頭数	%	語彙数	語彙
色彩語彙(単色)	227	59.3%	10	bori,buri,ezi,ili,jana,magal,muluk,niro,rema,wati
色彩語彙(単色)+色彩語彙(単色)	6	1.6%	4	jana bita buriburida, buria bora, bori janada, buri niro aana
色彩語彙(単色)+模様語彙	5	1.3%	4	bori gor ezi, jana shoma aana, rema ta gor eze, wati gor ezi
色彩語彙(単色)+部分語彙	35	9.4%	21	bori fol ezi, bori nyar ezi, buri kalu ezi, buri nyaar ezi, ezi dabana buri, ezi luku bori, ezi luku buri, ezi luku wati, ezi mata kul buri, ezi mete buri, ezi mete kaalo buri, jana fol ezi, jana luku wati, jana nyar ezi, niro fol ezi, niro kol ezi, rema fol ezi, rema kol ezi, wati fol ezi
色彩語彙(混色)	52	13.6%	6	birte, Borach, Borate, dami, eligte, kirich, sagato
色彩語彙(混色)+部分語彙	6	1.6%	5	Boracha fol ezi, Borate fol ezi, kirite mete kul bur, bora fol ezi; bora kal ezi
模様語彙	37	9.7%	5	bok, gor ezi, hole, nyakori, shoma
模様語彙+部分語彙	4	1.0%	1	nyakori luku buri
部分語彙	11	2.9%	5	kal ezi, kole ezi, luku buri, luku buri, mete kul buri
合計	383	100.0%	61	

ける語彙の形成のしかたは、まず被修飾語が先頭にきて、次いで修飾語が後ろから被修飾語を修飾するというかたちをとる。毛色の明らかな383頭の牛のデータをもとに、そこで用いられたウシの毛色の表現について見てみよう。383例のなかで用いられた表現は60種類であった。それらは単独の語彙素による表現か、2種類の語彙の組み合わせになっており、3種類以上の組み合わせの表現は用いられていない。表2に、それぞれの毛色をあらわす語彙の組み合わせの結果を示してある。毛色の表現方法は、以下のような組み合わせがある。

- ① 色彩語彙
- ② 色彩語彙+色彩語彙
- ③ 混色の模様語彙
- ④ パターンの模様語彙
- ⑤ 部位の毛色を表す語彙(以下部位語彙)
- ⑥ 色彩語彙+パターンの模様語彙
- ⑦ 色彩語彙+部位語彙

- ⑧ 混色の模様語彙＋部位語彙
- ⑨ パターンの模様語彙＋部位語彙

毛色をあらわす語彙の修飾・被修飾関係には、明らかな法則がある。単色の色彩語彙と混色の模様語彙、混色の模様語彙とパターンの模様語彙の間に、修飾・被修飾関係はみられない。これは、混色の模様語彙が、色彩と同時に不定形な模様もあらわした語彙だからだろう。部位語彙は、毛色をあらわす語彙の中ではもっとも多様な語彙素をもつが、単独で用いられる例は少なく、大部分が他の語彙を修飾するのに用いられる。これは部位語彙が、基本的な色彩、あるいは模様により個体を区別した後に、同じ色彩、あるいは模様の個体を二次的に区別するために用いられるからだろう。

次にそれぞれの毛色語彙についてみてゆこう。

① 色彩語彙

単独の色彩語彙で言及された毛色のウシは、全体の6割近くにのぼる。色彩ごとの言及数は、色彩により、大きな違いがある（表4参照）。言及数の多いものは順にベージュ、灰色、白、赤と、赤をのぞけばいずれも明るい毛色である。逆に少ないものは、黒、銀色、黒っぽい紫、紫と、いずれも濃い毛色となっている。基本的な色彩語彙として取り上げた紫（mulug）はウシでは言及数が1と極端に少ないが、ヤギの毛色では、全体の10%近くを占め、白に次いで2番目に多い毛色である。

② 色彩語彙＋色彩語彙

単独の色彩語彙であらわすことが困難な中間的な色彩は、二つの色彩語彙を組み合わせて言及される。けれども、このようにして表現される毛色は、全体の1.6%、単色の毛色の5%弱にすぎない。ホールは、色彩複合語の助けをかりずに、基本的な色彩語彙によって、単色の毛色の95%を分類している。

③ 混色の模様語彙

いくつかの色彩が入り混じった毛色をあらわす語彙は、全体の13.6%で用いられている。このなかでも頻繁に用いられるのが、ベージュと赤の入り混じった毛色をあらわすborate（これはメスに対してもちいる語彙で、オスに対してはborachという）という語彙で、38例（9.9%）で用いられている。

④ パターンの模様語彙

模様の語彙により示される毛色は、特定の2色の組み合わせからなっている。斑点模様は、地の色は白であり、斑点は普通、黒か赤である。ストライプ模様は、地の色は赤か黒であり、ハイライト部分は白である。通常このような色彩の組み合わせの場合は、色彩語彙を付加せず、模様の語彙のみで言及する。模様の語彙は、37例（9.7%）で用いられている。

⑤ 部位の毛色を表す語彙

部位をあらわす語彙は、単一の語彙素から成る場合と、「部位名」+「色彩語彙」という、二つの語彙素から成る場合がある。単一の語彙素も、二つの語彙素に分解して言及されうる。たとえばalengaという、肩から首より前が赤い、あるいは黒い色をもつ個体は、また、luku burida（首+赤い）、あるいはluku watida（首+黒い）という部位名と色名の組み合わせで言及されうるのである。じっさいには、部位をあらわす語彙が、単一の語彙素のみで用いられた例は、一度もなかった。「部位名」+「色彩語彙」という形で用いられたのは、11例のみである。後に述べるように、特定の部位に特定の毛色が出る場合には、地の毛色が相対的に規定されることがしばしばある。ここで部位の毛色のみを用いていることは、あるいは身体全体の毛色を言及しなくても、聞き手はそれを十分に予想できることが期待されているのかもしれない。

⑥ 色彩語彙＋パターンの模様語彙

これはわずか1.3%である。表2で言及されている模様の語彙は、すべてストライプ模様である。言及されている地の色は、4つのうちひとつが黒であるのをのぞけば、すべて通常はストライプの地の色とならないもの、すなわちベージュ、金色、明るい紫、である。牧童が毛色を区別するさいに、どのような特徴にまず注目するのか、明らかなことはわからない。語の修飾の順序から考えるならば、まず色彩が認知され、次いで模様が、その色彩の中での二次的な弁別基準として用いられるようにも思われる。しかし、同一の色彩の、模様のない個体は、同一の模様をもつ個体よりもはるかに数が多い。だから模様のほうが認知上目立ちやすいのではなからうか。牧童は、まず模様に着目し、ついでその下位分類として色彩を用いると考えるほうが、可能性が高いように思われる。

⑦ 色彩語彙＋部位語彙

これは、21種類の表現法が用いられた。言及された回数は、のべ36回で、全体の9.4%にあたる。部位語彙のほうは、単独で用いられる場合と同じで、単一語彙素であらわされることはなく、常に「部位名」＋「色名」で言及された。だから、全体としてこの組み合わせは、「身体全体の毛色」＋「部位名」＋「部位の毛色」という形をとることになる。

⑧ 混色の模様語彙＋部位語彙

これは6例で、全体の1.6%にすぎない。6例のうち5例まで、部位の毛色は白である。

⑨ パターンの模様語彙＋部位語彙

これは4例(1.0%)である。すべて細かい斑点模様に、首から上が赤の毛色のものである。

表3 身体の色と部位の色との組み合わせ

部位名	身体毛色		ezi	huri	bori	wati	rema	jana	niro	bora	nyakori	kirite	合計
	部位毛色		(白)	(赤)	(ベージュ)	(黒)	(うす紫)	(灰色)	(金色)	(赤ベージュ)	(緑がけ)	(白ベージュ)	
fol(顔)	ezi		•	6	4	2	4	1		4			21
kahu(腰)	ezi		•	1						1			2
kol(肩)	ezi		•						1				1
luku(首)	ezi		•					1					1
nyar(頬)	ezi		•	2	1				2				5
daban(頬)	huri		1	•									1
luku(首)	huri		3	•							4		7
mele kul(頭頂部)	huri		3	•								1	4
luku(首)	bori		1		•								1
luku(首)	wati		1			•		1					2
合計			9	9	5	2	4	3	3	5	4	1	45

表4 明度の段階別にわけたウシの毛色の集計

毛色	明度(色票)											頭数	段階別 合計	%	
	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20				
暗い毛色	wati 黒	•	•										7		
	magal 黒っぽい紫		•										6		
	mulug 濃い紫		•	•	•								1		
	低い明度の模様												4	18	4.8%
中間の毛色	huri 赤				•	•							31		
	niro 金色			•	•	•	•	•					12		
	ili 銀色			•	•	•	•	•	•	•			6		
	中間明度の模様												62	111	29.8%
明るい毛色	jana 灰色							•	•				49		
	rema うすい紫							•	•	•			26		
	bori ベージュ									•	•		53		
	ezi 白										•		36		
	高い明度の模様												79	243	65.3%
合計												372		100%	

• 明度とは、色票調査のときにインフォーマントが当該色彩名で回答した色票の明度を示す。

•• 混色の色彩と、パターンの模様、部位の模様で言及された毛色は、すべて「模様」にふくめてある。混色の色彩の場合は、最もちかい単色の色彩の明度段階に準拠して分類。パターンの毛色の場合は、中間明度に入れている。部位の毛色で言及されている場合は、その部位以外の身体全体の毛色に準拠して分類した。

さて、部位語彙の多くは色彩語彙や模様語彙との組み合わせで用いられる。だから色名の組み合わせだけでも、膨大な数の語彙ができそうだが、じっさいにはそうはなっていない。

表3は、部位名称が用いられた56例のうち、身体の毛色がわかっている45例について、身体の毛色、身体の毛色とコントラストをなす部位と、その部位の毛色をまとめている。これをみると、部位語彙で言及される場合の身体毛色と部位の毛色の組み合わせは、きわめて限定されていることがわかる。全体のうち、白と赤の組み合わせが16例（36%）、白と、赤以外の毛色の組み合わせが23例（51%）、赤と、白以外の毛色の組み合わせが5例（11%）、その他の組み合わせが1例（2%）である。

(1)–3 ホールの家畜管理と毛色多様化のメカニズム

ホールの毛色を分類するための語彙 (biif) を、色彩語彙、パターン語彙、部位の毛色をあらわす語彙にわけて記述し、その組み合わせによる言及のシステムについて述べてきた。ここでホールのウシの毛色多様化のメカニズムと、彼らの用いている毛色語彙の関連についてふれておこう。

東アフリカの牧畜民の飼養するウシの毛色については、生態学的な条件のもとでの自然淘汰を重視する説と、文化的な価値観にもとづいた人間による人為淘汰を重視する説がある。前者によれば、気温が高く、厳しい直射日光にさらされることの多い低地では、明るい毛色の家畜が多くなるという (Finch and Western 1977)。それにたいして、後者では、人々の人為的な選択によって家畜の毛色多型が促進されていると考えられている。人為淘汰説によれば、このような社会では、家畜の毛色は個人の同一化の対象になったり、儀礼が行われるさいの機会を区別するための指標になったりしている。種ウシの選抜をするさいには、個人の好みの毛色の種ウシが選択され、結果的にそれが毛色の多様化をもたらすという (福井1991)。

ホールでは、色彩は個人の同一化の対象とはならないし、また儀礼で特定の

毛色の家畜が供犠される機会も多くはない。¹⁰ じっさいホールの種ウシの選択基準は、毛の色つやが美しく健康であること、メスウシと盛んに交尾しようとする、母ウシが多くの乳を出していたことである。こうした性質が特定の毛色と関連づけられることはない。一般に、目立つ毛色は、邪視を恐れて種ウシの毛色には選ばれない。毛色の選択にかんして、あるインフォーマントは次のように言った。「黒 (wati) はよい毛色ではないから、すぐに去勢牛にする。だからアルボレ (ホールの北方地域集団) では黒の毛色のウシが少ない。斑点模様 (nyakori) は毛色が美しいから邪視にあう。だから種ウシにしない。多くの場合種ウシには白 (ezi) か灰色 (jana) を選ぶ。なぜならこれらの毛色のウシは多いからだ。ほかのウシと異なった毛色では、これは〇〇の種ウシだといって、ほかの人々が見てしまう。その結果邪視にあう。」¹¹ 多くの人々が彼のように毛色を選択するならば、むしろ毛色は均一化していくとさえ考えられる。¹²

もしじっさいに、ホールの家畜に毛色の多様化を促進するようなかたちで人為的な淘汰圧がかけられていないとするならば、毛色にたいしては、緩やかな

10 特定の毛色の家畜が供犠されるのは、以下のような場合だけである。1) 年齢階梯の中で、社会の中核となる指導層の世代組が交代する儀礼のとき、供犠される種ウシの毛色は、白、緑、斑点のいずれかが好ましいといわれる。白は光を、緑は萌える植物を、斑点は多産をあらわすからである。黒は闇をあらわし、また赤は血をあらわすので、これらの毛色を持つウシは供犠には用いられない。2) いくつかの地域集団では、降雨を願う儀礼のさいに供犠される未經産ヒツジの毛色は、黒がよいといわれる。黒は水の色であり、湿り気をあらわし、また神の色でもあるからである。

11 ホールでは、特定の人間の持つ邪視を buda といい、不特定の人間の注視による邪視を ile balsha という。他人の注目をあびやすいものは、それによって結果的に注視された対象が損なわれると考えられている。注目を浴びやすいものは、邪視を恐れて、隠されたり (食事を他人に見られることを避ける)、他と同じ物が選ばれたり (種ウシを目立たない毛色にする)、視線をそらすおとりが用いられたり (作物の実った畑の道沿いの目立つところに、動物の頭蓋骨をかけておく) する。

自然淘汰圧がかかる可能性が考えられる。表4は、身体全体の毛色が明らかな372頭のウシの毛色を、明度を基準に3段階に分類して、それぞれの頭数の割合を示したものである。これをみると、明らかにホールでは明るい毛色のウシが多いことがわかる。¹³

色彩の分類が社会の分類の中核に位置づけられないといっても、ホールが家畜の毛色にたいして、決して無頓着なわけではない。あるインフォーマントは、ウシの毛色は成育段階によって変化するし、また新鮮な草の多い雨季には鮮やかになり、乾季にはぼやけてくると言った。ここには毛色にたいする、きわめて現実的で細やかな観察がある。

近年の色彩語彙研究は、色彩の想起の正確さは、色彩に内在する認識のしやすさとともに、言語がいかに色彩を分類しているかによって大きな影響を受けることを明らかにしている (Lucy and Shweder 1979)。ホールの色彩語彙は、多くの言語の色彩語彙がふくむ色彩の焦点とは異なった範囲をカバーしている。しかしこの色彩語彙は、彩度の低い色彩をもつホールのウシの毛色を、過不足なく分類する。このことは、ウシの毛色が色彩複合語をほとんど用いることな

12 じっさいにそれぞれの社会でどのような毛色の種オスが選択されているかについての実証的なデータを提示した研究は少ない。ホールの事例では、384頭のウシのうちで、種ウシは8頭おり、その毛色は以下のようになっている。

	arr(種ウシ)	kurkurit (未成熟の種ウシ)	合計	%	384頭中に占める毛色の%
bori	1	1	2	25	13.8
huri		1	1	12.5	8.1
wati		1	1	12.5	1.8
rema fol eze		1	1	12.5	1.0
borach	1		1	12.5	9.9
nyakori	1		1	12.5	4.7
dami	1		1	12.5	1.0

13 FinchとWesternはケニアの16の地域で飼養されているウシの毛色を、濃い毛色(黒とこげ茶色)とその他の明るい毛色に二分し、高度や緯度による毛色の割合の相違を調べている。ホールウシ群の明るい毛色の割合「中間の毛色」29.8%と「明るい毛色」65.3%の合計(95.2%)は、Orma(96%)、Samburu(91%)、Turukana(89%)といった明るい毛色の割合の最も多い民族の場合と同等の割合となっている。

く言及されることから明らかである。ホールの色彩語彙は、まず特定の色彩語彙により分類される個体群を、一定のまとまりを持った集合として認識することを可能にしていると考えられる。これらの色彩語彙のカバーする範囲は、色彩複合語で言及される領域に比べ、インフォーマント間で認識の安定した領域でもある。ホールの色彩語彙はこのように、ホールの生活地域の生態に適応した毛色を持つ家畜を分類、想起し、さらにコミュニケーションするのに適しているように思われる。さらに身体の特定位の毛色が全体の毛色と異なっている場合、部位の毛色をあらわす語彙を用いて、下位分類し、個体の特定を容易にする。

しかし毛色には、きわめて出現頻度の高い毛色がいくつかある。たとえばベージュや灰色、白という明るい色の毛色の出現頻度は、群れ全体の13%から14%にたつする。これらの同一毛色の個体群を識別するには、さらに別の区別の指標が必要であろう。このような指標として、角の分類と耳切りの分類について述べる。

(2) 角の分類

ホールには、他の東アフリカの牧畜民に見られるような、角にたいする矯正技術はない。ウシの角は、形によって、6種類に分類されている。buuteは長い角、muridaは短い角、bantelは水平に伸びた角、bajeは前下方に向けて湾曲した角、laio guiteは後方に向けて湾曲した角、moyeは角のない個体をあらわす。(図3)

(3) 耳切り

家畜の耳に入れられる切込みを、hezという。hezには、家畜の所有者のクランをあらわすもの、他の民族から略奪したウシであることをあらわすもの、自分の好みのウシ(ambset)であることをあらわすものがある。ほかに、病気のウシを瀉血するために耳の下半分を切る場合、個人の標識として耳を半分切

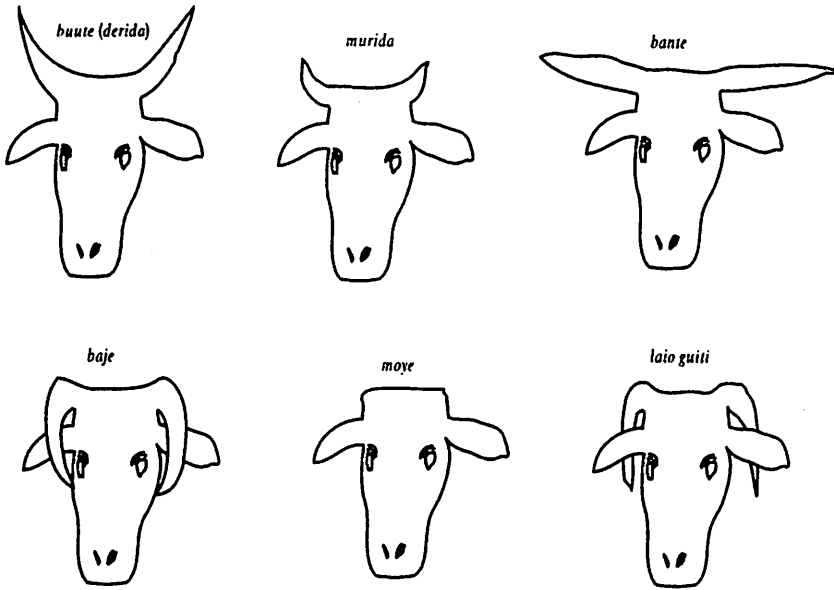


図3 ウシの角の形状

り取る場合、仔牛が続いて死産したときに、続いて生まれたウシにまじないとして切込みを入れる場合などがあるが、これらはhezとはいわない。クランをあらわす耳切りの形では、複数のクランが同一の形を共有することがある。(図4) これらのクランの間では、通婚は行われない。

ホールでは、仔ウシの5割以上、成牛の6割以上が耳切りを入れられる。成牛のほうが仔ウシよりも耳切りを入れられている確率は有意に高いが、どの段階でウシに耳切りを入れるかの判断は、所有者によって大きく異なる。

表5は、6人の所有集団のウシの耳の切り込みの一覧である。特定のクランには、そのクランをあらわす標識となる耳切りのタイプが最も多い。しかし所有集団ごとにみると、10~30%が他クランの耳切りをもつ牛であることがわかる。なかにはFurtoクランの所有集団Cのように、半分近くのウシが他クランの耳切りを持つ場合もある。こうしたウシは、婚姻のさいの婚資として得る場合や、交換によって得る場合が多い。他クランの耳切りを持つウシの場合でも、

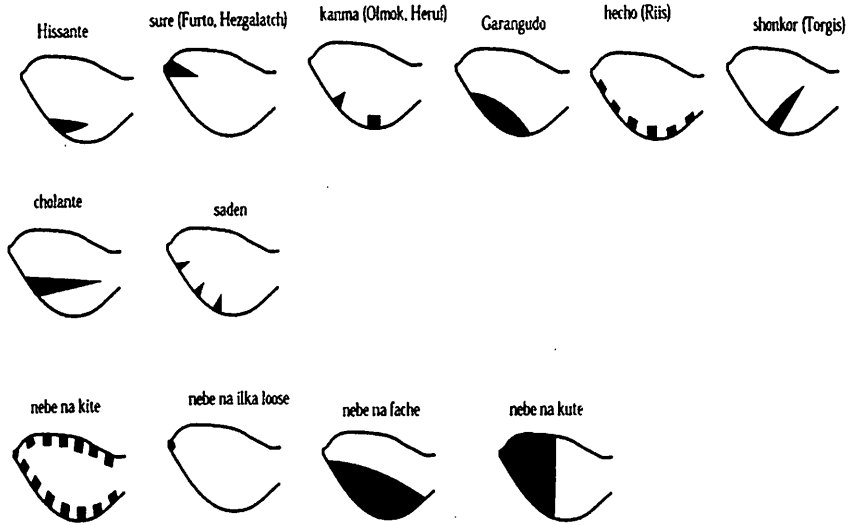


図4 ウシの耳切りの形状

表5 所有単位集団ごとの、耳切りのタイプの分布(頭)

克蘭 所有単位集団	Riis A			Furto										Olmok F			合計			
	m	f	計	B			C			D			E			計		f	計	計
耳きりタイプ 標識	m	f	計	m	f	計	m	f	計	m	f	計	m	f	計		f	計	計	
hecho Riis(克蘭)	36		36																	36
sure Furtoなど(克蘭)	1	5	6	21	38	59	4	12	16	5	10	15	9	18	27	117				123
hissante Hissante(克蘭)				6	6	12	8	14	22	3	3		6	6	12	37				37
kanma Olmok(克蘭)	1	1	2	5	10	15	1	1					1	1	2	17	2	2	4	23
garangudo Garangudo(克蘭)							1	1							1					1
shonkor Torgis(克蘭)				1	1											1				1
cholante 略奪したウシ	1	1					1	1		2	2	1	1	2	5					6
saden Boranaのウシ				2	2					4	4				6	1	1			7
nebe na kite Favorite oxen	1	1	2	3	2	5	1	1	1	1					7					8
nebe na fachi 満血	2	2	4	9	10	19	2	2	3	3	1	1	2	26	1	1	2			30
nebe na kute 個人的標識	5	1	6	1	1	2	3	3	2	2					6					12
nemure まじない	1	1	2	1	1										1					2
耳切りせず	7	8	15	8	11	19	2	3	5	3	4	7			31	1		1		47
合計	18	52	70	47	82	129	16	36	52	11	26	37	11	27	38	257		8		333

その仔牛は自分のクランの耳切りを入れる。

耳切りが家畜の所有者を区別するために用いられることもある。ひとつのウシ囲いにいるウシは、その戸主のものといわれるが、じっさいは兄弟間で特定のウシに対しての所有権が決まっている。こうした兄弟間の所有権を明らかにする場合は、兄のウシには右耳に耳切りを入れ、弟のウシには左耳に耳切りを入れる場合がある。また、クランをあらわす耳切りのないもう片方の耳に、兄弟のウシを見分けるための耳切りを入れる場合もある。

小家畜の場合は、ウシに比べて増減がはやいので、兄弟間の所有をはっきりさせるために耳切りを早めに入れることがある。表のRiisの兄弟は、ウシには兄弟間の所有を区別する耳切りは入れていないが、ヤギには、兄の所有するものにはGarangudo、次男のものには片方の耳にsure、三男の所有するものには両耳にsureの耳切りを入れて区別していた。

(4) 個体識別と分類体系

毛色、角の形状、そして耳切りのカテゴリーを組み合わせることによって、どれくらいの精度でウシの群れを個体に弁別することが可能だろうか。このことをみるために、私のデータの中でもっともウシの所有頭数が多い集団を選び、そのなかでも最も数の多い毛色であるベージュ (buri) のウシの属性を一覧で示してみた。(表6) このリネージの管理しているウシは、定住集落、出づくり集落、牧畜キャンプの3箇所にわけて飼養されていた。このうち資料は、出づくり集落と牧畜キャンプで飼養されているウシにかんして集められた。ウシの頭数は、136頭である。そのうちでベージュ色の毛色をもつウシは25頭で、他の毛色のウシよりもずば抜けて多い。これらのウシは、出づくり集落と牧畜キャンプに設けられた3つの家畜囲いにおいて飼養されていた。牧童はそれぞれの家畜囲いのウシを別々に放牧するから、家畜囲いのなかのウシの群れが、個体識別の単位となる。ウシ囲いAでは、14頭のうち、11頭は、角の形、耳切り、性別と育成段階のいずれかの指標で、他と識別可能である。けれどもNo.10か

表6 視覚的指標による家畜の個体弁別

識別No	飼養地	ウシ囲い	毛色	角の形状	耳切り形状	性別・成育 段階がター	成育段階	性別	個体名 接頭辞	個体名
1	furich	A	borida	gichida	ma katto	maar	1	f	inne	alenga
2	furich	A	borida	ma gusi	hissante	maar	1	f		dima gagre
3	furich	A	borida	-	-	lit	1	m	ini	galo
4	furich	A	borida	derida	hissante	goran	2	f	ini	ohol
5	furich	A	borida	derida	ca tska na late	goran	2	f		dalu
6	furich	A	borida	murida	ma katto	kurkurit	2	m		korbessa
7	furich	A	borida	derida	kanma	takka dafte	3	f		hauloo
8	furich	A	borida	baje	nete na facti	okkite	3	f		jalbul
9	furich	A	borida	derida	-	okkite	3	f		jalbul
10*	furich	A	borida	derida	sure	okkite	3	f		alenga
11*	furich	A	borida	derida	sure	okkite	3	f		haaloo
12*	furich	A	borida	derida	sure	okkite	3	f		jalbul
13	furich	A	borida	derida	sure	arr	3	m	ini	jalbul
14	furich	A	borida	derida	sure	hau	3	m	ini	birite
15	furich	As	borida	-	-	maar	1	f		gudur
16*	furich	As	borida	-	-	maar	1	f	inne	gudur
17*	furich	As	borida	-	-	maar	1	f	inne	jalbul
18*	furich	As	borida	-	sure	maar	1	f	inne	bora
19	furich	As	borida	-	-	lit	1	m	ini	gudur
20	furich	As	borida	-	nete na facti	lit	1	m	ini	jalbul
21	reer	B	borida	-	-	maar	1	f	inne	korbeesa
22	reer	B	borida	-	sure	lit	1	m	ini	korbessa
23	reer	B	borida	-	-	lit	1	m	ini	birite
24	reer	B	borida	derida	nete na facti	okkite	3	f		ohol
25	reer	B	borida	derida	sure	okkite	3	f		korbessa

*印は、いずれの視覚的分類の指標によっても相互に区別できない個体

ら12の3頭は、どの指標によっても相互に区別することはできない。ただしそれぞれの名称は異なっている。ウシ囲いAsでは、No.15から17の3頭が同様に相互に区別することができない。ウシ囲いBでは、5頭のいずれも相互に区別が可能である。

最も数の多い毛色の場合でも、一つのウシ囲いの中で視覚的特徴にもとづいたいずれの分類の基準によっても識別ができないのは、3頭程度である。つまり、成長段階や性別の分類に、毛色や角、耳切りなどのカテゴリーを組み合わせると、家畜の群れの大部分、おそらくは95%以上を、個体ごとに識別することが可能になる。さらに相互に弁別不能としたこれらの個体についても、名称によって区別されており、牧童は明らかに個体認知している。おそらく身体の大きさや特定の傷、さらには特異な行動様式など、分類カテゴリーではあらわせない諸特徴によって、個体を識別しているものと思われる。

3. 2. 3 群れの分節化にかかわる分類

ここまでは、家畜の管理技術に関連する分類体系と、個体識別に関連する分類体系をあつかってきた。次に、家畜群を分節化し、構造的に把握することを可能にする、家畜の系統と年齢集団による分類について述べることにする。

ホールはウシに個体名を与えている。ウシの個体名は、搾乳のときに仔ウシを誘導するときに用いられる。ホールは、ウシは自分の個体名をちゃんと聞き分けると考えており、仔ウシ囲いから特定の仔牛の名を連呼して、1頭ずつ呼び出し、母ウシに授乳させるのである。このように、個体名の付与はその利用管理とかかわっている。しかしまた、ときに100頭ちかくになる群れを把握するさいの、構造的認知の手がかりとしても大きな意味をもっている。

(1) 個体名と系統

(1)-1 家畜の個体名

家畜の個体に名前を付ける慣習は、いくつかの牧畜民社会から報告されている。ケニアのナイル系牧畜民トゥルカナを調査した太田は、ヤギ、ウシ、ラクダ、ロバにつけられた膨大な個体名の分析を行っている。トゥルカナではこうした個体名は、経産メスにのみつけられる。(太田1987c) 他方、タンザニアのダトーガや、ケニアのガブラでは、いずれも母系を通じての個体名の継承がなされており、個体名は同時に母系の系統をあらわす名称とも重なっている。(梅棹1987 Imai 1982)

ホールでは、系統的なかたちで個体名が付与される家畜は、ウシのみであり、ヤギ、ヒツジ、ロバには個体名は与えられない。ウシの個体名は、ダトーガやガブラと同じように、母系を通じて継承される。だから、ウシの場合は、個体名を共有する個体群が、同一の母系集団を構成することになる。¹⁴

14 母系集団に同一の名称が与えられることから、ウシの名称は個体名ではなく、集団に対する名称であると考えられるかもしれない。また、名称じたい類型的であるので、この意味でもこれを個体名というのは違和感をいだかせるかもしれない。しかし、ウシの場合はこの名称が個体に対する呼びかけに用いられることから、ここでは個体名と考えることにする。ちなみにホールでは人間の個人名も、ウシの毛色にもとづいた類型的なものであり、さらにそれは二世代うえの親族から規則的に継承されるものである。その意味では人間にしるウシにしる、その個体名じたい、社会的な分類原理と切り離して考えることはできないのである。

それならばウシの個体名は、どのようなものだろうか。ホールではほとんどの個体名には何らかの意味があり、所有者でなくとも、その意味のおおよそのところは推測できるものとなっている。384頭のウシにつけられていた64種類の個体名のうち、意味の確認できた52種類の個体名についてまとめたのが表7である。

表7 ウシの個体名とその意味

	No.	名称	色	意味	言語
飼育に関する情報					
毛色	1	bora	ベージュ色(bori)のウシ。		Hoor
	2	nira	ふかい金色(nira)のウシ。		Hoor
	3	magal	黒に近い紫(magal)のウシ。		Hoor
	4	biru	ベージュ(bori)と白(wei)が混じった毛色。		Hoor
	5	bade	ふかい銀色(sip)あるいはわず紫色(rema)のウシ。		Hoor
	6	dama	白、黒、青の細かい縞じまの混色(dama)のウシ。		Hoor
	7	adjo	白いウシ。adjoはBorana語で白の意味。		Borana
	8	dala	ベージュ色(bori)のウシ。		Borana
	9	dima	赤(bori)のウシ。		Borana
	10	baba	赤いウシ。		Borana
	11	bade	ふかい銀色とうす紫の混色のウシ。		Borana
肉種	12	lok	上半身が黒い水平のワートンカラー(bok)のパターンをもつウシ。		Hoor
	13	gorie	背が白いワートンカラー(gore ese)のウシ。		Hoor
	14	guchi	腹面に白い縞じまのほいろ(dhom)毛色のウシ。Borana語でリョウウのこと。		Borana
	部位毛色				
15	alerga	首の周りが黒い。あるいは赤のウシ。		Hoor	
16	becda	顔が白いウシ。		Hoor	
17	boreboda	ベージュ(bori)たか顔が白いウシ。		Hoor	
18	gabare	顔の両サイドが赤または黒のウシ。		Hoor	
19	gaare	顔に白い縞すじが入っているウシ。		Hoor	
20	kulo	目の周りが黒いウシ。		Hoor	
21	dima gaare	dimaはBorana語で赤。Gaareは顔に白いタテすじが入ること。		Borana	
22	nogole	顔の白いウシ。		Nyangatom	
身体特徴					
23	bute	角の大きいウシ。		Hoor	
24	moie	角がないウシ。		Hoor	
25	Deera	背が高いウシ。		Hoor	
26	gu	腹に傷をつけたウシ。		Hoor	
27	chiuli	耳を両方とも切ったウシ。		Hoor	
特異な行動					
28	julbul	人になつかず、すぐ逃げけるウシ。成長すると人に乳を与えることを拒む。		Hoor	
繁殖	29	eto	仔ウシが生まれてもすぐ死ぬため、耳に宝貝を付けたウシ。		Hoor
	30	fugo	足から先に生まれたウシ。		Hoor
	31	garnuale	大雨季(garnuale, Borana語)に生まれたウシの中で、唯一乾季まで生き延びたウシ。		Borana
獲得機会に関する情報					
慣習的贈与					
32	dumar	結婚のときに、婚約として婿側から嫁側最初に与えられる未経産のウシ。		Hoor	
33	gusei	結婚のときに、婚約として婿側から嫁側に二番目に与えられる未経産のウシ。		Hoor	
34	ohol	結婚後夫婦が新たな家を作るときに、嫁側が婿側と与える未経産のウシ。		Hoor	
35	gudur	男の赤ん坊が頭を叩いたときに父が与えるウシ。		Hoor	
36	aba	結婚して独立した家を開いたときに、父の与えたウシ。父のウシのmanaとは別の名を与える。		Borana	
37	abser	生物学的な父だが、法的な父ではない父(abera, Borana語)が与えたウシ。		Borana	
38	obul	兄の与えたウシ。		Borana	
交換・略奪					
交換の対象	39	sarqo	去勢牛と交換した。仔ウシが成長するとsarqoと呼ぶ。Borana語で去勢牛を意味するsarqara。		Borana
	40	yerr	大きな去勢牛と交換したウシ。		Dassanech
	41	gordo	ヒツジと交換したウシ。		Hoor
	42	korbeesa	雄ヤギ(korbeesa, Borana語)と交換したウシ。		Borana
	43	abil	イタリア製の甲冑と交換したウシ。		Hoor
44	unmur	少女が足首につける足輪(muiko, Borana語)ではunmur)と交換したウシ。		Borana	
交換の相手	45	alamu	alamuという人から買ったウシ。		Hoor
	46	galo	galoという人から買った、あるいはgaloというところで買ったウシ。		Hoor
	47	kanu	kanuから買ったウシ。		Hoor
	48	koteso	Kotesoと交換したウシ。		Hoor
	49	galgalo	galgalo(Borana語で夕方)という人から買ったウシ。		Borana
交換の場所	50	wando	平原(wando)である土地で買ったウシ。Hoor, Dassanech, Karoのような土地。		Hoor
	51	chalbe	chalbeから来たウシ。		Hoor
略奪					
52	haalo	敵による仲間の殺害の報復に奪い取ったウシ。		Hoor	
53	golba	BoranaのGolbaというところから略奪してきたウシ。		Borana	

ウシにつけられる個体名は、牛の個体に関する情報と、その個体を獲得した機会に関する情報の2種類に分けることができる。

1. 個体に関する情報をあらわす個体名

個体に関する情報は、さらに、毛色に関する個体名、身体的な特徴に関する個体名、特異な行動に関する個体名、その個体の履歴に関する個体名の4つに分けることができる。

① 毛色に関する個体名

これには、色彩をあらわす個体名、模様をあらわす個体名、部位の毛色をあらわす個体名がある。

A 色彩をあらわす個体名

これは、いくつかの色の入り混じった混色を示す語彙も含め、11種類のあった。一般によく用いられる色彩語彙素のうち、個体名として用いられているのは、ベージュ、ふかい金色、濃い紫の3つのみである。また、いくつかの色彩の入り混じった混色をあらわす語彙は、biriteとdamiの二つが用いられている。これらの個体名のうち5つの語彙は、Borana語に由来するものである。

B 模様をあらわす個体名

これは3種類のみである。shomというたての縞模様に、Borana語を用いている。

C 部位の毛色をあらわす個体名

8種類ある。家畜の毛色に言及するときに、部位の毛色については、部位名＋色彩語彙というかたちで言及され、単一語彙が用いられることはなかったが、個体名として用いられるときは、7種類までが単一語彙素によっている。

② 身体特徴をあらわす個体名

5種類のみである。角の形、体の大きさ、腹につけた傷、耳切りの形に言及

する。

③ 特異な行動をあらわす個体名

1種類のみである。人間を忌避するという性格に言及している。

④ 履歴をあらわす個体名

3種類のみである。出生時の状況や幼少時の履歴に言及している。

2. 獲得機会に関する情報

これは慣習的な家畜の贈与にかかわるものと、交換や略奪にかかわるものに分けられる。

① 贈与の機会にかんする個体名

5種類ある。娘や妹の結婚時に、花婿側から婚資として贈与されるウシのように、贈与の機会や頭数が厳密に決められたものと、父や兄が与える牛のように、厳密な規定がないものがある。特定の機会に贈与されるウシにつけられる個体名は、機会の種類に応じて類型化されている。

② 交換と略奪にかかわる個体名

14種類ある。交換に関連するものは12種類あり、交換の対象、交換の相手、場所について言及している。略奪に関するものは、2種類ある。交換の対象が家畜である場合は、家畜の種類に応じて、ウシに与えられる個体名は類型化される。

(1)ー2 個体名の語彙

ホールのウシの個体名には、ウシの毛色にちなんだ名称がかなりある。しかしこれらの名称は、毛色を記述するときの毛色語彙とは、あるていど異なった

語彙の体系をなしているように思われる。22種類の毛色にちなんだ名称のうち、じっさいに毛色に言及するさいに用いられる語彙は、6種類にすぎない。のこり16種類の名称は特定の毛色をあらわしているけれど、毛色の記述には用いられない。そのうち8種類は、外来語である。のこりは、部位の毛色に関する単一語彙の名称である。じっさいに部位の毛色について言及する場合は、部位名+毛色という二項命名法が用いられていると述べたが、単一語彙のほうは、個体名にもちいられているのである。

次に注目される点は、個体の外見的特徴を示す個体名だけでなく、個体が獲得された機会について言及している個体名が多いということである。これは、牛の個体名がどのような機会につけられるのかを考えれば、容易に納得がいく。それは、以下の三つである。1. 特定の所有者のもとで母ウシから誕生した場合、母ウシから同じ個体名を譲り受ける。2. ただし同名のウシが多くなればあい、特定の仔ウシに、その毛色にもとづいた名を母ウシの名に付加することがある。しかしこれは非常にまれである。3. 贈与や交換などによって、ウシの所有者が変わった場合、そのウシに新たな命名が行われる。

このように、新たな個体名が家畜群の中に誕生するのは、3の場合である。だから、ウシの外見に言及する個体名だけでなく、それが獲得された状況に言及する個体名も増えることになる。このことは、ホールに、ウシが所有者の間を循環する交換財としての側面をもっていることを意識させるかもしれない。逆に、ウシの所有者が変わった時点で命名がなされるために、ウシの履歴や、特異な行動に注目した命名は、数が少ない。

さて、ウシの移籍にともなって名付けが行われるのならば、所有者ごとに所有しているウシの個体名は異なるはずである。じっさいにはどのようになっているのだろうか。調査した5つのウシ囲いで、ウシの個体名の間にごれぐりの相違があるかを示したのが表8である。64種類の個体名のうち、23種類は複数のウシ囲いに共通する個体名であった。3分の1以上の個体名が、複数の所有集団で共通のものとなっているのである。

表8 ウシの個体名と所有集団

個体名	所有集団	Furto A	Furto B	Furto C	Furto D	Furto E	ウシの頭数	所有個体数	名称の由来
bule		1	1	8	2	3	15	5	毛色
dumar		1	2	3	1	2	9	5	慣習的贈与
sango		6		4	16	6	32	4	交換対象
ohol		5	7	2	3		17	4	慣習的贈与
moie				1	2	7	10	3	身体特徴
haalo			5		1	3	9	3	略奪
niro		3		2		3	8	3	毛色
bidu			2	1		2	5	3	毛色
jalbul		3	23				26	2	特異行動
aba		21		2			23	2	慣習的贈与
magal			4			8	12	2	毛色
gudur			10		1		11	2	慣習的贈与
korbessa			6		3		9	2	交換対象
unmur				7		2	9	2	交換対象
kulo			3	5			8	2	毛色
alenga		2	5				7	2	毛色
alamu				4		2	6	2	交換相手
golba					4	2	6	2	略奪
alben		1		4			5	2	交換対象
bodda		2				3	5	2	毛色
gordo			2	2			4	2	交換対象
dalu			1	2			3	2	毛色
Deela				1		2	3	2	身体特徴
wando			16				16	1	交換場所
fugo			11				11	1	履歴
gui		8					8	1	
konso			8				8	1	交換相手
abeer		7					7	1	慣習的贈与
adio				5			5	1	毛色
birite			5				5	1	毛色
diko						5	5	1	
book		4					4	1	毛色
chufa						4	4	1	
dima gaare			4				4	1	毛色
gannaale			4				4	1	交換相手
guchi					4		4	1	
gusei		4					4	1	慣習的贈与
obul		4					4	1	慣習的贈与
bute			3				3	1	身体特徴
diima		3					3	1	毛色
galgalo			3				3	1	交換相手
anno						2	2	1	
bale		2					2	1	
bora			2				2	1	毛色
borebodda			2				2	1	毛色
chalbe			2				2	1	交換場所
elo			2				2	1	履歴
galo			2				2	1	交換相手
ngole				2			2	1	毛色
ohol dami		2					2	1	毛色
safara		2					2	1	
yerr				2			2	1	交換対象
albil				1			1	1	交換対象
dabane		1					1	1	毛色
dami				1			1	1	毛色
danme					1		1	1	
gare				1			1	1	毛色
kalabo				1			1	1	
kanu					1		1	1	交換相手
gorle					1		1	1	毛色
obbolge			1				1	1	
warr				1			1	1	
合計		82	136	62	40	56	376		

このことは、ウシ個体名が、多かれ少なかれ類型化され、文化的に共有された語彙の中から選ばれたものであるということを示しているだろう。個体名は、単なる毛色の記述や、譲渡の機会の記述とは区別された、一つの語彙を形成しているのである。このことは、毛色にちなんだ個体名の語彙が、おおくは他民族の語彙からの借用であったり、普通は用いられない換喩的な部位の毛色の語彙によっていることからもうかがえる。また、身体的な特徴や特異な行動、履歴にかんしても、それらは類型化され、特定の個体名が与えられる。このことは、贈与される機会にちなんだ個体名でも、交換や略奪にちなんでつけられた個体名でも同様である。ホールはウシの個体名にかんして、ある程度限定された語彙をもっており、それを用いるさいの慣習的な用法をもっている。ウシの個体名は、こうした意味で、他の語彙からは独立した一つの体系をもっているといえる。

(1)-3 所有関係と系統認知

1. 個体名と系統

ウシの個体名は、母系により継承される。系統の認知と個体名のあいだには、密接な関連がある。

ホールは仔ウシに、原則的に、母ウシと同じ個体名を与える。たとえば母牛の個体名をWandoとする。すると仔ウシの個体名は、Wandoとなる。ただし母ウシの個体名の前に、メスの場合はinme (娘)、オスの場合は、ini (息子) という接頭辞がつけられる。つまり、メス仔ウシはinme Wando、オス仔ウシはini Wandoという個体名になる。メスの仔牛がさらに仔牛を出産すると、そのメスウシの個体名からは接頭辞inmeが脱落して、母ウシと同じ個体名、つまりWandoで呼ばれることになる。オスウシは、ini Wandoのままである。この命名原理にしたがうと、1頭のWandoから多くのWandoが生まれてくることになる。このように母系を通じて個体名を共有するウシの集団を、man、あるいはmannaとよぶ。

ホールの家畜管理においては、あとに述べる理由で、母系による系統認知は大きな重要性をもっている。けれどもじっさいに、ホールの牧童が、特定のウシから、具体的に関係を開連づけてさかのぼることのできる系統の深度は、3世代程度である。つまり、母系集団のなかの系譜関係は、現存する母ウシと仔ウシの関係をもとにして認識されているのである。母系集団は、だから、個体名を共有し、同一の系統であると認識されているけれども、その系譜関係は明らかではない一次的な分節と、はっきりと親子関係の認識された、世代深度が3世代までの二次的な分節に分かれている。以上が母系集団の基本的な構造だが、次のような例外的な場合も、同一の母系集団に属するとみなされる。

1) メスの仔ウシに、目立つ毛色が出現し、それをもとに母親とは異なった個体名をつけた場合。個体名は異なるが、この仔ウシとその子孫たちは、母ウシと同じ母系集団であるとみなされる。2) メスウシを交換して他のウシを得た場合に、そのウシの個体名は交換に出したメスウシとは異なるが、母系集団は交換に出したメスウシのものであるとされる。

ウシと同様に、ヤギやヒツジの小家畜も母系の系統が認知されており、母系集団のことをmanと呼んでいる。ただし牛のように特定の母系集団に属する個体に、特定の個体名がつけられることはない。また、個体名がないため、ウシに見られるような、同一の個体名を共有し、具体的な関係は忘れられているが一つの血統に属するとみなされる大きなレベルでの集団の分節もみられない。

2. 所有者とウシの個体名

家畜管理において、母系集団の認知が重要である理由のひとつは、母系集団とウシの所有権が、密接に関連している点にある。ホールの家畜の所有単位は、共通の父祖をもついくつかの核家族の集団である。この集団が、家畜、ことにウシを共同で飼養する単位であり、集落でも牧畜キャンプでも、一つの家畜囲いを用いる。名目上は集団がもつすべてのウシは、父祖（年長リネージの最年長男性）のものであり、父祖の家畜をすべて継承するのは、長男である。しか

表9 ウシの固体名と所有者(1)

名 称	所 有 者				台 計 (頭)
	Kalu	Erre	Bura	Dibo	
aba	5	16			21
gui	8				8
abeer				7	7
sango	5		1		6
ohol			5		5
book		4			4
gusei	4				4
obul	4				4
jalbul	3				3
niro		3			3
diima	3				3
alenga	2				2
bale	2				2
bodda	2				2
ohol dami					2
safara		2			2
alben	1				1
bule	1				1
dabane			1		1
dumar		1			1
台 計	40	26	9	7	82

しじっさいには、次男以下にも家畜が分配されており、個別の家畜の所有権は、この家畜の飼養集団の中で、はっきりと決められている。この集団内で家畜が移譲された場合に、その家畜の産む仔ウシは、すべて母ウシを移譲された所有者のものとなる。

表9は、80頭あまりのウシを所有するリネージの、ウシの個体名と所有者の関係を表したものである。この集団では、もっとも個体数の多いabaという個体名のウシと、4番目に個体数の多いsangoという個体名のウシが、二人の所有者の間にまたがっているだけで、あとはすべて、個体名ごとの母系集団は、4人のいずれかの所有者に帰属している。これは、上記の個体名付与の原理と所有原理の関連を、とてもはっきりと示している。

つぎに、より複雑な個体名と所有者の関係を示す例をみてみよう。表10は、150頭あまりのウシを所有する飼養集団の、ウシの母系集団と所有者の間の関係を示したものである。この集団では、6人のウシの所有者がいる。ウシは全部で155頭確認できたが、所有者を確認したウシは153頭である。この飼養集団

表10 ウシの個体名と所有者(2)

一次母系 群 名 称	二次母系 群 名 称	所 有 者 名						合 計	
		Arshai	Ole	Sika	Bongo	Duke	Armar		
1	jalbul	1	4						
		2	3						
		3	2						
		4	2						
		5	1						
		6	1				1		
		7		3					
		8		3					
		9		3					
		10		1					
		11	不 明					3	
		4	2					33	
2	wando	12	2						
		13	2						
		14	2						
		15		2					
		16		1					
		17						2	
		18						3	
		19	不 明					1	
		19	不 明	2					2
3	gudur	20	3						
		21			2				
		22			2				
		23			2				
		24			1				
		25	不 明					2	
				1					
				3				16	
4	konso	27	4						
		28	3						
		29	3						10
5	halo	30	3						
		31	2						
		32	2						
		33	1						8
6	dirna gaare	33		3					
		34		4					7
7	fugo	35		2					
		36				2			
		37					2		6
8	alenga	38	2						
		39	3						5
9	ohol	40	3						
		41			3				6
10	gannale	42		2					
		43	1	2					5
11	birte	43	4					4	
12	bute	44		4				4	
13	sango	45		3					
		46	1						4
14	bidu	47		2					
		48	1						3
15	bora	49	1						
		50	1						2
16	galgalo	51	3						3
		52	3						
17	magal kulo	53		3					6
		54		3					3
18	alamo	55		3				3	
19	yerr	56		3				3	
20	korbess	57		1				1	
21	chuuli	58			3			3	
22	dumar	59				2			2
		60							
	合 計		69	44	20	4	8	8	153

には、個体名を共有する一次的な分節である母系集団が22ある。最大のものには33頭のウシを擁しており、もっとも小さいものは、1頭のウシしかいない。さらにこれらの一次的母系集団は、実際の母子関係の認知にもとづいて、少なくとも55の二次的な母系集団に分節される。二次的母系集団は、1頭から4頭のウシからなる。もっとも大きな一次的母系集団は、その中に少なくとも11の二次的母系集団をもっている。小さな一次分節は、それ自体がひとつの二次分節でしかない。さてここで、所有者と母系集団の関係をみると、個体数の多い一時的母系集団は、複数の個人によって所有されている。しかし、個体数の少ない小さな一時的母系集団と、ほとんどの二次的母系集団は、複数の個人にまたがることなく、特定の個人の所有になっていることがわかる。系譜関係の分節からみれば、牛の集団は二重に分節化されているのだけれど、所有者との関係をみてみると、少なくとも大きな一時的母系集団は、二次的母系集団に分節される前に、所有者により分節されている。すなわち、最終的には三重に分節されていることがわかる。所有者とウシの個体名の関係は複雑にみえるけれど、じっさいはこのように、明確な原理によって分節化されているのである。

(2) 年齢組

家畜の集団は、母系の系統だけではなく、生まれた時期によっても分節される。ホールは、家畜は年に二回ある雨季に集中して誕生するという。¹⁵ 1年の間に生まれた個体を、ホールはdaalanが同じである、という。daalanとは、dal-「産む」という動詞からの派生語であり、年齢組といいかえてもよいだろう。年齢組は、ウシ、ヤギ、ヒツジすべての家畜に認められている。牛の場合は、少なくとも6年までさかのぼって、年齢組が記憶されている。仔畜の場合

15 熱帯のウシの妊娠期間は9ヶ月から9ヶ月半であり (Dahl and Hjort 1976)、ホールもウシの妊娠期間を9ヶ月と考えている。エチオピア西南部では、年に2回2~3ヶ月間の雨季がある。ウシは雨季の終わったあとの牧草の豊富な時期に妊娠しやすく、その時期に妊娠すると、1年後の雨季の最中に出産することになる。

は、同じ時期に生まれた個体をまとめてひとつの仔畜囲いに入れ、母畜とは別に飼養するために、牧童は年齢組を、ひとつの集団として明確に認識する。

(3) 関係性の認知と群れの管理

家畜の個体は、毛色や成長段階にもとづいて認知される。さらに群れは、系統や年齢組といった個体間の関係性や、所有単位により、分節化される。牧童にとって、家畜の群れは、たんに個々の個体の集まりではなく、いくつもの小単位にわかれた、明確な構造を持ったものとして認識されているのである。このような群れの分節と構造化は、家畜群の管理に大きな役割を果たしている。

ホールの牧童は、ときに100頭をこえる家畜を管理する。ホールが放牧中に家畜にたいして行う介入は最小限である。牧童は放牧地に到着すると、しばしば群れをそのままにして昼寝をし、群れを見失うことさえある。小家畜のように、幼い子供が牧童をしている場合には、そのような場合に何頭かの個体が群れから離れることがある。だから、群れ全体の確認は、群れの構造に精通している年長の所有者により行われることが多い。確認は、まだ家畜が寝ている早朝に行われる。彼らは家畜囲いに入り、確認を行う。けれども彼は、家畜の数を数えているわけではない。確認のやり方には、いくつかの構造化の原理が用いられる。

もっともよく用いられるのが、母系集団を基準にして家畜の確認をするやり方である。具体的には、次のようにする。まず大きな母畜を確認する。次いでその仔畜たちを確認する。そのようにしてひとつの母系集団に属している家畜を順に見てゆくのである。このとき、仔畜のばあいは、年齢組でも確認する。このほかに、性別・成長段階にもとづく分類カテゴリーを用いる牧童もいる。これは、次のようにする。まず母畜を確認する。このとき個体を識別するためにまず毛色を確認し、さらに耳切り、角の順で個体を特定する。次いで去勢牛を確認する。最後に仔畜を確認する。これは、オスの仔畜、メスの仔畜、未經産牛という順で、年齢組にもとづいて行う。いずれのやりかたでも、最初に確

認されるのが母畜であるということは、メスの個体を中心にすえて展開してゆく牧畜のありかたをよくあらわしている。いずれにしても、ホールの個体の確認法の特徴は、徹底して具体的な個体間の関係性に依拠して、確認を行うということである。最後まで個体の数を数えることはしない。¹⁶

通常群れの構造を把握している牧童が放牧を行う場合は、放牧中も、群れ全体の構造を、母系集団や年齢組をもとに常に確認している。水のみ場や放牧地において、しばしばいくつかの群れが行き会って交差する。群れの構造を十分に把握していない牧童の場合は、二つの群れが交差するときには、棒で懸命に群れが交じり合わないようにする。けれども群れの構造を十分に把握している牧童の場合は、家畜の群れが交じり合った場合も、大きな介入動作を行うことはない。群れが分離したじてんで、自分の群れから離脱した個体をすぐに確認できるからである。熟達した牧童は、群れの構造だけではなく、個体の性質にも注意を払っている。そして出産の近い個体や、群れから離脱しやすい個体に対して常に注意を注ぎ、群れの統制をはかっているのである。

4 要約と展望

本稿では、ホールで用いられている家畜の分類原理を網羅的に記述し、それらの家畜の管理、個体認知の基盤、群れの構造的把握という、三つの技術と関連づけて説明した。

1 群れの管理と関連する分類

家畜の群れの分類は、家畜の種類や育成段階ごとの群れ管理技術と密接に関

16 太田はTurkanaの牧童がヤギの群れをどのように分節化し把握しているかについて興味深い調査をおこなっている。それによれば、Turkanaの牧童が群れを小単位に分節するときに用いる示差的特徴は性別、体色、所有者、誕生の時期など多様であり、またどの特徴を用いるかも、牧童個人により異なっている。さらにTurkanaの牧童は、単位ごとのヤギの頭数を記憶しており、構成単位に分節したあと、その単位の頭数をカウントすることによって、個体の存否を確認する。(太田 1987b)

連している。また性別・成長段階に関する分類は、去勢技術や出産の管理、搾乳技術と関連している。

2 個体識別と関連する分類

これらの技術を運用することを可能にしているのが、家畜の個体識別である。個体識別には、毛色の分類体系をベースとして、角の分類と耳切りの分類が合わせて用いられている。

3 群れの構造把握に関連する分類

家畜の放牧単位である家畜囲いの中の群れは、さらに、母系集団と年齢組にもとづいて分節化されている。ウシの場合は母系集団に属す個体には共通する個体名が与えられ、二重の分節構造をもっている。このような群れの下位区分単位は、所有者ごとの所有単位にそって分節化されており、個体の所有関係を明らかにする。また日帰り放牧における群れの把握においても、このような分節構造は、群れを記憶の容易な小単位に分節し、それぞれの個体の存否を確認するための方法として利用されている。

さて、家畜の分類は、たんに家畜管理技術と結びついているだけではない。すでに述べたように、東アフリカの多くの牧畜社会では、家畜の分類原理が、人間社会の構成原理とも密接に関連していることが知られている。

エヴァンス=プリチャードは、ヌエルにおける去勢牛のもつ儀礼上の重要性を強調し、一般的にヌエルでは、去勢牛は男性に、メスウシは女性に類比されると指摘している (Evans-Pritchard 1940)。エチオピア西南部のクシ系農牧民ダッサネッチを調査したアルマゴールは、ダッサネッチでは、去勢牛は水平的な集団編成原理である男性の年齢集団と密接に関連づけられ、種ウシは長老集団と関連づけられる。それにたいしてメスウシは、垂直的な集団編成原理である親族集団と関連づけられるという (Almagor 1972)。

また牧畜民がウシの毛色に関する詳細な分類を行っており、それが個人のア

アイデンティティを形成の大きな要素となっていることを指摘する研究もある。リーンハートはディンカでは男性はお気に入りの去勢牛の毛色と同じ色彩にたいして、とても敏感な感受性をもっていることを指摘している (Lienhardt 1961)。さらに福井は、エチオピアのスルマ系農牧民ボディでは、家畜の毛色の分類体系が個人的アイデンティティとかわるだけでなく、集団や儀礼の機会との分類とも密接に関連していると述べている (福井 1979, 1988, 1991)。

家畜群のなかの系統集団と、人間の社会構造の関連について述べた研究も存在する。梅棹は、ダトーガでは母系血縁集団のウシ群は、複婚家族内での妻を中心とする小集団ごとによって所有されていることに注目し、ウシの母系血縁集団のモデルがダトーガの家族構造の中にあることを示唆している (梅棹 1987)。

ホールの家畜の象徴的な意味づけについては、別稿で論じたので、ここでは多くを言及しない。要点だけを、上記の諸研究に関連づけて述べる。ホールは、ウシの性別や成長段階によるカテゴリーを、人間のカテゴリーと類比することはある。しかしそれは、ダッサネッチなどで報告されているように、十分に一貫したものではない。また、若い男性が特定の去勢牛をお気に入りのウシとしてふかい愛情の対象とすることはあるが、その毛色が、ボディやディンカのように、個人のアイデンティティ形成の重要な要素となることはない。さらに、ウシの群れの構造と所有者の集団構造の間に、何らかの対応関係を類推することは、確かに可能だが、ダトーガのように、明確な相似的対応関係があるわけでもない。

むしろ重要な点は、ホールの家畜の意味づけを考えるさいには、たんにウシの分類のみをみるだけでは十分ではない、ということである。ウシ、ヤギ、ヒツジといった家畜の種のあいだの関係性を考慮に入れる必要がある。またホールの場合、他民族を表象するさいには、家畜だけでなく野生動物の分類が、重要な意味をもっている。しかし、そうした動物種や、いくつかの種を包摂するカテゴリー間関係を考えるさいに、それぞれの種の集団をどのようにホールが把握しているかということは、重要な意味をもつように思われる。たとえば

ウシの群れが年齢組や二重に分節化された血統によって構造化されているということは、ホールの定住集落における年齢階梯制や親族構造の分節化との類似性を思わせる。じじつく人かの牧童は、家畜の存否を確認するときに用いる血統と年齢組を用いるチェックの方法は、定住集落での会合のさいに出席者をチェックするときの方法とまったく同じであると言う。それにたいしてヤギやヒツジの群れでは、ウシの群れほどには詳細な分節化はなされていない。ウシと小家畜の象徴的な位置づけの違いは、おそらくはこうした群れの把握のしかたのちがいと密接なつながりがある。日常的な家畜管理を基盤にした群れの分節化の程度は、ホールがみずからの社会的環境を、動物の類や種、カテゴリーを通して思考するとき、動物のどのレベルでの分類を、社会のどのレベルでの分類と対応付けるかという点にかんして、大きな影響をもっているように思われる。本稿では家畜集団の分類体系の分析を通して、家畜の管理技術をみてきた。しかしたんにそれだけではなく、これをもとにすれば、ひとびとが自分の社会的な環境世界を想像するさいに用いている思考のモデルを、他の動物種との関係もみたくうえて、より説得的な形で提示できる可能性があるのではないかと思うのである。

参考文献

- Almagor, U. 1972 Name-oxen and ox-names among the Dassanetch of southwest Ethiopia. *Paideuma* 18: 79-96.
- Berlin, B. & Kay, P. 1969 *Basic color terms: Their universality and evolution*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Dahl, G. & Hjort, A. 1976 *Having Herds: Pastoral Herd Growth and Household Economy*. Stockholm: Department of Social Anthropology, University of Stockholm.
- Evans-Pritchard, E. E. 1940 *The Nuer*. Oxford: Oxford At the Clarendon Press.

(『ヌアー族 ナイル系一民族の生業形態と政治制度の調査記録』向井元子訳 岩波書店1978)

Finch, V.A. & Western, D. 1977 Cattle colors in pastoral herds: natural selection or social preference? *Ecology* 58 : 1384-1392.

福井 勝義 1979 「色彩の認知と分類－東アフリカの牧畜民Bodi族」 『国立民族学博物館研究報告』 4 : 557-665

福井 勝義 1988 「家畜における毛色多様化選択の文化的装置－エチオピア西南部の牧畜民ボディアの民族遺伝観から－」 『在来家畜研究会報告』 12 : 1-46

福井 勝義 1991 『認識と文化－色と模様』 民族誌－』 東京大学出版会

Imai, I. 1982 Small stock management and the goat naming system of the pastoral Gabra. *African Study Monographs, Supplementary Issue* 1:43-62.

Leinhardt, G. 1961 *Divinity and experience: The religion of the Dinka*. Oxford: Oxford University Press.

Lévi-Strauss, C. 1962 *La Pensée Sauvage*. Paris: Plon.

(『野生の思考』大橋保夫訳 みすず書房 1976)

Lucy, J.A. & Shweder, R.A. 1979 Whorf and his critics: Linguistic and non-linguistic influence on color memory. *American Anthropologist* 81 : 581-615.

稲田 浩志 1998 「スーダン東部ベジャ族のウシ名称群－個別別リストをもとに－」 『スワヒリ&アフリカ研究』 8 : 28-80

太田 至 1987a 「トゥルカナの家畜分類とそれにともなう家畜ハズバンドリーの諸相」 和田正平 編 『アフリカ 民族学的研究』 pp.731-769 同朋社

太田 至 1987b 「牧畜民による家畜群の構造的把握法」 和田正平 編 『アフリカ 民族学的研究』 pp.771-785 同朋社

太田 至 1987c 「家畜の固体名はいかに付与されるか－北ケニアの牧畜民トゥルカナ族の事例より－」 和田正平 編 『アフリカ 民族学的研究』 pp.787-816 同朋社

Tornay, S. 1973 *Voir et nommer les couleurs*. Nanterre: Laboratoire

d'ethnologie et de sociologie comparative, Université de Paris X.

梅棹 忠夫 1987 「Datoga牧畜社会における家族と家畜群」 福井勝義 谷泰編 『牧畜文化の原像 生態・社会・歴史』 pp.423-469 日本放送出版協会

Some notes on livestock classification of the Hoor of Southwestern Ethiopia

Yukio Miyawaki

This paper intends to describe livestock classification of the Hoor. Hoor are Cushitic agro-pastoralists who dwell around a small flood plain along the Weito river in southwestern part of Ethiopia. Hoor herd cattle, sheep and goats. Different classification systems are utilized according to practical situations of livestock herding. I describe classification systems according to the contexts in which each of them is utilized. These contexts are grouped into three headings, namely, (1) livestock management, (2) individual recognition, (3) grasp of group structure. Classification of herd and classification of gender and life stage is relevant in livestock management. Coat color classification, horn shape classification and ear clipping system are utilized in individual recognition of livestock. Naming system, pedigree and age group classification is employed in grasping the structure of livestock herd.